

Dance Forum 2003

報告書

フォーラムテーマ
「ダンスワークショップの可能性」

2003年6月6日(金)・7日(土)・8日(日)

会場: 森下スタジオ

企画・主催: NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク
助成: セゾン文化財団
協力: アサヒビール株式会社 / スタッフ塾

NPO法人 Japan Contemporary Dance Network
〒600-8092 京都市下京区神明町241 オパス四条501
TEL 075 - 361 - 4685 FAX 075 - 361 - 6225
jcdn@jcdn.org <http://www.jcdn.org/>



JCDN DANCE FORUM 2003報告書

目次

企画趣旨	P.1
スケジュール	P.2-4
参加者アンケートより	P.5-7
フォーラム議事録	P.8-69
参加者名簿	P.70-72

企画趣旨

JCDNは、ダンスと社会を結ぶNPO法人として設立して3年目を迎えます。ここ数年の間にダンスの新しい芽が出てきたように思います。2001年に「JCDN設立ミーティング」を森下スタジオで行い、全国から約120名のダンス・文化関係者が集いました。その後「踊りに行くぜ」などで日本各地の方々と知り合い、新たなプロジェクトが生まれてきました。しかしダンスの可能性を広げていくためには、定期的に各地のダンス・文化関係者が集い、様々なテーマに関して話し合い、情報交換を行う場が必要です。本年、セゾン文化財団の創造環境整備活動の助成を受け、JCDNダンスフォーラム2003を開催しました。

今回のメインテーマとして「ダンス ワークショップ」を取り上げました。ここ数年、日本各地でダンスのワークショップが増えてきました。ダンサー向けだけではなく、一般、子供、障害者、先生など幅広い方々を対象に行われ、期間も1日から1ヶ月に渡る滞在(レジデンシー)型のワークショップなど、様々な形態で行われています。内容的にも、カラダを動かすワークショップから、参加者と一緒に新しい作品を創っていく試みなど、地域に根ざしながらその地に新しい文化を育てていくひとつの要因になってきているように思います。

ワークショップの内容はアーティストそれぞれの方法があり、各主催者と共にプログラムを作っていきますが、なかなか他のアーティストや、他の地域ではどのように行っているのかを知るチャンスがありません。いくつかのケーススタディを発表していただき、そこからアーティストの視点、オーガナイザー サイドの視点、参加者の視点から話し合いました。

この先、各地でワークショップの開催がますます増えていくと思いますので、どのようなワークショップが望まれているのか、アーティストにとってワークショップの意義、ワークショップとダンスクラスの違い、ワークショップを開催する上で、最低気を付けないといけないことなどを、今後に向けてざっくばらんに話し合い、お互いの情報交換の場になったらと考え企画しました。

2日目は、いくつかのテーマに分かれての分科会を行い、続いて隅田川にて水上バスでのダンス鑑賞、セミナー、交流会が行われました。3日目の最終日は、JCDNが4年前から行っています「踊りに行くぜ！！ー全国パフォーマンススペース間のダンス巡回プロジェクト」の関東地区の選考会+ダンス ディスカッションをセミナー参加者に公開して行いました。



Schedule

6月6日（金）全体ミーティング テーマ：ワークショップの可能性（Cスタジオ）

13:00 - 14:00	JCDN挨拶、連絡事項、参加者紹介 フォーラムテーマ 「ダンスワークショップの可能性」について・・・ JCDN 佐東範一
14:00 - 16:00	ワークショップの事例報告（ケーススタディ / 各15分） 1 「地域に開かれたアートワークの試み・地域滞在協働創作型アートプロジェクト さきらダンスワークショップ・パフォーマンス『リビングルーム/さきら編』」（03年5-6月） 白井剛（発条ト）+ 山本達也（栗東芸術文化会館さきら）
	2 アーティスト滞在型ワークショップ・参加者との作品発表まで～ ”ダンスジェネレイト福岡”の試み」（03年1-2月） 近藤良平（コンドルズ）+ 吉村美紀（福岡市文化芸術振興財団）
	3 「1994年より毎年連続して行っている初心者向けのワークショップ ～参加者発表公演まで」 砂連尾理（振付家・ダンサー）+ 西田尚浩（京都市東山青少年活動センター）
	4 「仙台・福岡・伊丹などにおけるワークショップ」 伊藤キム（伊藤キム+輝く未来）
	5 「岩下徹ワークショップ」 志賀玲子（JCDNボードメンバー/アイホールプロデューサー）
16:00 - 16:30	－休 憩－
16:30 - 18:30	フリーディスカッション
18:30～	交流会

Schedule

6月7日(土) 分科会・セミナー (C+Aスタジオ)

10:30 - 12:30	分科会 (C+Aスタジオ) テーマ 「ダンスにおけるスペース・劇場間のネットワーク・共同作業について」 テーマ 「新しい観客の開拓 PR 宣伝について」 テーマ 「カンパニーいかに運営していくのかー経営・人材・カネ」 テーマ 「ダンス評論の今後」
12:30 - 13:30	昼食事休憩 (各自)
13:30 - 14:30	分科会総括 (Aスタジオ)
14:45 - 17:15	アサヒ・アート・フェスティバル2003 「水上アートバス ダンスパフォーマンス」鑑 ダンス by 山田せつ子・天野由起子・有田美香子 ～船上という限られた空間ならではの、さりげない身体表現～
14:45	森下スタジオ出発 森下駅(都営大江戸線) 汐留駅下車乗り換え ゆりかもめ汐留 駅(新交通ゆりかもめ線) 日の出駅下車(徒歩2分) 日の出桟橋 交通費390円(地下鉄210円・ゆりかもめ線180円)(所要時間約60分)
15:50	「日の出桟橋」発 約40分乗船時間 (水上バス乗船代660円)
16:30	浅草着 浅草駅(都営浅草線) 東日本橋駅下車乗り換え(一度改札を出る) 馬喰横山駅(都営新宿線) 森下駅下車 森下スタジオ(所要時間約30分)
17:30 - 19:00	セミナー 「社会から見たダンスの役割」 (Aスタジオ) JCDNは発足以来ダンスが社会と接する場について考え実践してきました。 ダンス関係者のみが鑑賞する閉ざされた関係ではなく、広範な観客や関係者による新 しい取り組みを作り出していかねばなりません。一方、ダンスの世界ではない広 い社会の側でも、ダンスやアートを手法にしながら普段あまりダンスなど見たこと ない人々を対象にした新しい試みが展開される例が幾つか見られるようになってい ます。 企業や自治体・政府がアートやダンスを取り入れることで何を生み出そうとしてい るのか。町づくり、地域活性化でダンスにはどんなニーズがあるのか。 そのニーズは顕在化しているのか。さらには、今後期待される雇用創造、交流産業と しての新産業創出の視点からはダンスにどんな役割が担えるのか。 このJCDNセミナーでは、ダンスの世界の外でダンスに関する実践に取り組んで いらっしゃる関係者をお招きしその背景をお尋ねすることを通じて、社会から見たダ ンスの役割の未来像を展望します。 【パネラー】 野田邦弘 : 横浜市都市経営局政策課課長補佐 (文化政策・観光政策による都心部活性化担当係 長) 守谷慎一郎 : 東京都観光汽船(株)社長 【司会】 河合雅樹 : JCDNボードメンバー/ インターアクティブ(株)シニアプロジェクトコーディネーター
19:00 - 20:30	交流会 (Aスタジオ)

Schedule

6月8日(日)「2003踊りに行くぜ!! Vol.4」関東地区 選考会+ダンスディスカッション(Cスタジオ)

このプログラムは、本年10月-12月に札幌・仙台・新潟・東京・名古屋・大阪・岡山・広島・松山・福岡・沖縄の計11箇所で行われます「踊りに行くぜ!! vol.4」の出演者を決めるための公開選考会です。関東での開催は今年が初めてです。

第一次審査としてビデオ審査を行い、41組の応募の中から6組の方々にこの選考会+ダンスディスカッションに出させていただくことになりました。他全国8箇所にて、この選考会+ダンスディスカッションを行います。

今回この中から数組のアーティストの方に「踊りに行くぜ!!」に出演していただくこととなります。出演者を決めるだけでなく、上演された作品について出演者と皆様とでディスカッションを行うことがこのプログラムの重要な目的です。各作品の上演の後に20分程度の時間を設定していますので、短い時間ではありますが皆さまの参加をお待ちしています。

*なお照明に関しましては、プログラムの都合上、地明かり程度となっていますことをご了解ください。

【プログラム】

(多少時間が変更することもありますので、ご了承ください。)

14:00 - 14:40	振付・出演者名 : 奥田純子 作品タイトル : Blank - 空白の時間 = 老女のポケー
5分休憩	
14:45 - 15:25	振付・出演者名 : 塩澤典子 作品タイトル : ギギギギファーファーファーボボボウーウーウー
5分休憩	
15:30 - 16:10	振付・出演者名 : 森下真樹 作品タイトル : デビュタント
20分休憩	
16:30 - 17:10	振付・出演者名 : 康本雅子 作品タイトル :
5分休憩	
17:15 - 17:55	振付・出演者名 : 岡田智代 作品タイトル : L・D・K
5分休憩	
18:00 - 18:40	振付・出演者名 : 金井久美 作品タイトル : みどりのうた03

テクニカルディレクター：相川正明 協力：スタッフ塾

平成15年度文化庁芸術団体人材育成支援事業

参加者アンケートより

女性・パフォーミングアーティスト・長野県・会員

コンテンポラリーアートの日本における今の状況を過不足なく伝えてくださったように思います。どうかするとアートをきどって社会との接点を持たない人々の集まり(実は社会との接点を持ってない、又は持つ気がない人々の集まり)になりがちですが、ボードメンバーの方々、パネラー、アドバイザーの質の高さがJCDNの活動の深さと広さにつながっていると思います。

8日の選考会、私用で最後まで見られなくて残念でした。ダンスに限らず先鋭を気取るアートは、人間の認知能力の一般的性質(見慣れぬもの、またはとてもお久しぶりのものに対しては確信が持てない)を逆手にとるのは良いとして、その行為或いは作為の奥底にひそむ自らのありように実は鈍感で不誠実であることが多く、心ひかれるというより不快感をもよおすものですが、私の見た作品の中ではその部分でのあり様に明るい希望を持つことが出来ました。

女性・ダンサー / 振付・東京都・会員

ワークショップの報告会では1,2,3までしか話を聞くことが出来なかったのですが、普段同業者がどのようにワークショップを行っているのか知る機会がないので、とても興味深かったです。刺激になりましたし、次回自分が行う時にもう少し内容の充実度をあげられるようにしたいと思います。

分科会ではテーマに参加しました。それぞれが抱えている問題や現在の状況などを話すことで時間はあっという間でした。その活動にあった方法を自分達で探すしかないのだ、と改めて実感しました。が何か解答を得たいと思っていた人には歯がゆかったかもしれません。

女性・ダンサー / 振付・宮城県・会員

3日間おつかれさまでした。実り多き3日間でした。

「WSの事例報告」は特に興味深かったです。「WSとは?」、「WSとクラスの違い」、主催者側から見たWSの捉えかた・アーティストの捉えかた、それとアーティストがWSを通して感じたり考えたりしている事などを聞く事が出来ました。

映像を見てアーティストによって行なわれている内容・視点が様々だったのは話を聞く以上に確認しやすくわかりやすかったので、このようなデータのまとまったものがあると「ダンスWS」の浸透も早まり、主催する担当者も、ダンスに興味のない上司に話を持ち掛けやすいのでは?などと感じました。

女性・京都・カンパニー制作・JCDN会員

大変参考になる意見が多く、参加して良かったと思っています。立場の違いはあっても悩んでいるところは共通点が多く「自分だけではない」という安心感と共感を持つことが出来ました。有難うございました。

男性・財団職員・東京都・非会員

6月7日の分科会セミナーのテーマ2に出席いたしました。制作者・アーティスト・ホールという、多様な視点からPR/宣伝について考えられたことは非常に良かったです。どうも有難うございました。

女性・ダンスプロデューサー・東京都・会員

ダンス関係の方々と目に見える状態でお話したり伺ったり出来たことが一番良かったです。

これからもっと話し合いたい、という時に時間の関係で足りなくなったのが残念ではありましたが、関係が出来たことで今後につながるのではないかと期待しています。

男性・財団職員・愛媛県・非会員

アーティスト、プロダクション、大学教授、企業スポンサー、行政など、いろんな立場の方のお話を聞け、とても勉強になりました。ただ、このイベントを高松という地方で、できるのか。(観客、出演者両面で) また、今は、近県(岡山、愛媛)で実施しているので、そのへんもどうかなーと感じました。

女性・団体職員・東京都・会員

分科会だけ参加しましたが、色々な現場の生の声がかけてよかったです。経験も立場も違う人が混じるので、話のレベルや関心事がばらけるのは仕方ないでしょう。でも、常に初心者はい続けるわけで、こうした議論は根気よく「続けること」が大事だと思います。

船上パフォーマンス、楽しみにしていたのですが、デッキにはダンサーが来なかったので、見られませんでした。隅田川見物はそれなりに楽しかったです。

女性・NPO職員・東京都・非会員

アーティストたちの直接の声を聞いたのが良かったです。

女性・NPO職員・東京都・非会員

今回のダンスフォーラムに関するご意見、ご感想をお書き下さい。制作者から公共ホールの方、アーティストまで、様々な方のお話が聞けて参考になりました。dBの大谷さんや、分科会でも言われていた、「ワークショップはアーティストの創作活動とはまったく違うものだろう」という考え方が新鮮で、頭の中が整理されました。

女性・財団職員・福岡県・会員

ダンサー、カンパニー主催者、制作者、財団などの招聘側と、様々な側面からの意見が聞けて、とても有意義な会だったと思います。ただ、分科会など時間が足りなかったように思いますが、皆さんと知り合いになれて、今後問題があったときにML等で相談できる場ができたと思うと、大きな成果だと思います。

男性・公共ホール職員・長崎県・非会員

月並みな感想ですが、コンテンポラリーダンスの総合芸術としてのクオリティの高さを改めて実感することができました。ワークショップの実例報告だけでなく、その動機(きっかけ)などがきけたらもっと良かったと感じました。集客の難しさは、ある程度分かっておりましたので、どこにどう伝えて事業として普及していくかは、内部でも検討していきたいと思ひますし、よきアドバイスがありましたらぜひ教えて下さい。

男性・書籍編集・東京都・非会員

具体的な解決策がでなくてもこういったフォーラムを開催すること自体、有意義だと思います。他社の編集者とも共同営業等の話ができましたので、良かったです。情報の共有をはかるために、こういった場は重要です。

女性・学生・神奈川県・非会員

様々な職場、仕事をされているこんなに多くの人々に出会う機会を設けていただいたことに感謝していません。何も分からない身分ながら大きな収穫になりました。未知の世界を少しだけ身近に感じる事が出来ました。

「踊りに行くぜ！！」地方公演のVTRを観たい。

地方発信の文化事業で成功している事例紹介、どの部分が成功要因なのか、現時点での問題点、行政の文化政策など。

大学教育の中でのアートの位置、学生の意見(お茶の水、早稲田、筑波の方々etc)など次世代育成の現場の声を聴きたい。

ダンサー・パフォーマーと制作・プロデューサーの互いに求めること、理解しておかなければならないこと。

今回の議題も続けて話し合いたい(今後できる可能性があることは前向きに実行していけるように)

個人的な興味になってしまうとは思いますが、他のアーティストたちがどのようなプロセスを経て「作品」をつくり、壊し、またつくり…して作品を練り上げて完成させていくのか聴いて見たい気がします。(昨年、「踊りに行くぜ」に参加したアーティスト「ダンスユニット セレノグラフィカ」さんが3箇所公演をする度”(作品が)よくなった～”というのとか実際どのような作業を繰り返していったのか、詳しくお話をうかがったり、作品も見たいです。

次回のテーマや問題点は、今回設定されたもので十分だと思いますが、今回は、どう結論を出すか、どう答えを見つけていくかに重点をおいたらいかがでしょうか？

今回のフォーラムに、多くのホール関係者の方がお見えになっておられましたので、ぜひネットワーク事業としての可能性(経費、移動手段、制作等々)を議論できたらと思います。フォーラムの分科会としてホール関係者を中心に、カンパニー、制作の方が参加されるといった具合のものがあれば、良いのではと思います。

テーマ < ワークショップの可能性 >

2003 年 6 月 6 日(金) 13:00 - 16:00

13:00 ~ 14:00 JCDN 挨拶、連絡事項、参加者紹介

14:00 ~ 16:00 フォーラムテーマ 「ダンスワークショップの可能性」について

(ワークショップの事例報告)

「地域に開かれたアートワークの試み・地域滞在協働創作型アートプロジェクト
さくらダンスワークショップ・パフォーマンス『リビングルーム / さくら編』

(03 年 5-6 月)

白井剛(発条ト) + 山本達也(栗東芸術文化会館さくら)

アーティスト滞在型ワークショップ・参加者との作品発表まで ~

「ダンスジェネレート福岡」の試み」(03 年 1-2 月)

近藤良平(コンドルズ) + 吉村美紀(福岡市文化芸術振興財団)

「1994 年より毎年連続して行っている初心者向けのワークショップ

~ 参加者発表公演まで」

砂連尾理(振付家・ダンサー) + 西田尚浩(京都市東山青少年活動センター)

「仙台・福岡・伊丹などにおけるワークショップ」 伊藤キム(振付家・ダンサー)

「岩下徹ワークショップ」 志賀玲子(JCDN ボードメンバー / 岩下徹制作)

佐東範一 (JCDN 代表)

JCDN の佐東です。

本日はお忙しい中、遠方からも含めたくさんの方にお集まりいただきありがとうございます。

今回のダンスフォーラムの開催には、セゾン文化財団からの助成と、スタッフ周りをアイカワマサアキさん率いるスタッフ塾に全面的にご協力いただき実現しております。最後の交流会には、アサヒビール株式会社よりビールとソフトドリンクの提供をいただいております。ありがとうございます。

今回3日間という長丁場のプログラムですが、全体のプログラムに関しては皆様のお手元にあるパンフレットを参照ください。2時からワークショップの事例報告として5組の方にお話していただきます。その後休憩をはさんでフリーディスカッションを行いますので、皆様が思っていच्छることなどをご発言ください。最後に交流会を行います。

明日に関してですが、10:30 ~ 12:30 まで分科会を開催します。(分科会の説明)テーマとしては、ここ(パンフレット参照)に書いてあるテーマの四つになります。明日参加される方はお名前とどのセミナーに参加されるかを明記してください。その後、各分科会でどういことが話し合われたかを発表していただきます。分科会の後、アサヒアートフェスティバルのプログラムの一つで、水上アートバスでのダンスパフォーマンスがありますので、参加できる方はみなさんで遠足のように行こうと思っています。そこで、山田せつ子さん、天野由起子さんと、有田美香子さんが踊ります。それを見て帰ってきてから、A スタジオでセミナーを開催します。セミナーの後、交流会を予定しています。

最終日は、JCDN が行っている今年で4回目になります「踊りに行くぜ!!!」全国パフォーマンススペース間のダンス巡回プロジェクト(札幌から沖縄まで全国11箇所で開催)の出演者を選出する関東

選考会を行います。この選考会は、昨年から各地で「選考会+ダンス・ディスカッション」という形で行っており、ダンスを踊っていただいた後に、お客さんを含めて、作品についてのディスカッションをする場を設けております。お時間のある方はぜひ参加して下さい。今年、東京で初めて選考会をおこないますが、41本の応募があり、その中から6組の方に踊っていただきます。

以上のような内容で、3日間盛沢山ですが、できるだけお時間のある方は最後までお付き合いくださいますようお願い致します。

今回の参加者の方は半分以上がJCDNの会員なので、JCDNがどういうことをしているかというのはご存知かと思います。もし、今回はじめて参加された方は、受付に無料のJCDNダンスファイルがありますので、ぜひお持ち帰りください。ダンスファイルと「踊りに行くぜ!!!」に関しては、文化庁の助成をいただいて実現できております。

JCDNのことを少しだけお話しますと、1998年にJCDN設立準備室として準備をはじめまして、今年で6年目を迎えます。会員数としては全国でアーティスト、オーガナイザー、評論家など、全部で約280組の会員の方がいます。

ダンスファイルを毎年発行していますが、去年のものに関しましては赤の表紙の日本語版と緑の表紙の英語版とをつくってしまっていて、今年に関しては今、CD-ROMをつくっています。CD-ROM版には、やはりダンスなので是非映像をいれたいと思い現在制作しております、9月にできる予定です。

2年前からずっとダンスのDVDの作成準備をしております、なかなか進まないのですが、ダンスのDVDを今年の夏か秋までには完成させたいと思っております。当初の予定では6枚組みで24組ぐらいのアーティストのものをつくらうとしたのですが、経済的にも音楽著作権などで難しい問題もありまして、8組のアーティストで2枚組のDVDを準備しております。楽しみにして下さい。自分のコンピュータでダンスを見るというのもなかなか楽しいものです。

あとインターネットでダンスの公演が予約できるという「JCDN ダンスリザーブ」を運営しております。今まで公演の予約ユーザーとしてほしい800人ぐらいの一般の人たちがダンスリザーブの利用者登録をされています。ワークショップの方も公演と同じ形でつくってしまったので、ちょっと使い勝手が悪かったのですが、できるだけ早くワークショップのフォーマットを作り変えて使いやすいようにしたいと思っております。

報告が長くなってしまいましたが、また質問などありましたらこの3日間の間にぜひ質問してください。あと、会員の方にですが、今回JCDNの会計報告というのを来られた方にお渡ししております。来られなかった方には送らせていただきます。ようやくJCDNもこのような形で皆様に会計報告を出せるようになりました。

それでは、今回遅れて来る方もいらっしゃいますが、今の時点でどういう方々がいらしているのか、お手元の参加者名簿と、お顔と名前が一致するように、順番に自己紹介をしてください。それでは、そちらの奥の方からよろしく願います。

- 北海道斜里町教育委員会のゆめホール知床というところからきました。藤尾岳史と申しますよろしく願います。95番です。
- マイムパフォーマンスをやっています、水と油のすがれいなと申します。この名簿の中には入っていませんが、86から88のグループのすがれいなと申します。よろしく願います。

- 87 番の水と油の高橋淳です。よろしくお願いします。
- 88 番の水と油の藤田桃子です。
- 1 番のアートネットワーク・ジャパンの大久保聖子です。よろしくお願いします。
- 2 番のアートネットワーク・ジャパンの南谷有花です。よろしくお願いします。
- 14 番、学生で、御茶の水女子大学で学んでいます。植松侑子です。よろしくお願いします。
- 94 番の京都造形芸術大学で学んでいます。学生の山口春美です。よろしくお願いします。
- 22 番の楠原竜也、パフォーマーです。発条トやルーデンス等で活躍させていただいています。あと自分でカンパニーAPE というパフォーマンスカンパニーを作りました。よろしくお願いします。
- ナンバー9 番の池田恵己と申します。ダンスの公演ですとかコミッションの制作をしています。よろしくお願いします。
- 17 番の大庭香織です。演劇をやっています。よろしくお願いします。
- 19 番の大野八重子と申します。愛媛県の松山からまいりました。DANCE LABO というのをやっています。よろしくお願いいたします。
- 追加名簿の 1 番の加藤弓奈です。ST スポットの方で働いております。
- 6 番、長崎県佐世保市よりまいりました、伊藤晋と申します。アルカス SASEBO というホールで事業と広報宣伝を担当しております。よろしくお願いします。
- 13 番、あんまりいいナンバーではないんですけど、うらわまことと申します。大学で経営学を教えています。よろしく。
- 41 番の東京造形大学で教員をやっています、清水哲朗と申します。よろしくお願いします。
- 33 番の五島智子です。障害者介護に関わりながら、ワークショップに関する事をやっています。よろしくお願いします。
- ナンバー35 番の神奈川県相模原市民文化財団の井上美由紀です。よろしくおねがいします。
- 70 番、東京ガス都市開発が行っております。パークタワーアートプログラムからまいりました。白戸恵子ともうします。よろしくお願いします。
- 80 番の北海道文化財団の林恒明と申します。よろしくお願い致します。

- 23 番の倉知佳子と申します。岡山でダンス・アンド・メディアダンス・アーカイブス、ダムダを準備中です。よろしくお願いいたします。
- 57 番千葉里佳です。仙台からきました。よろしくお願いいたします。
- 91 番目黒のパーシモンホールで事業を担当しております。小比類巻有乃と申します。よろしくお願いいたします。
- 113 番、JCDN のボードメンバーをやっております。高樹光一郎と申します。よろしくお願いいたします。
- 47 番のセゾン文化財団の久野敦子です。よろしくお願いいたします。
- 46 番のセゾン文化財団の岡本純子です。よろしくお願いいたします。
- 81 番の小見純一と申します。前橋から来ました。よろしくお願いいたします。
- 93 番の山賀ざくろと申します。わたくしも前橋の方からまいりました。よろしくお願いいたします。
- 62 番の永瀬園子と申します。長野県に移り住んで1年半で、長野県でぼちぼちやっておりますが、パフォーミングアーティストとしてやっております。
- 44 番の鈴木邦江です。東京でダンスを創り踊っています。よろしくお願いいたします。
- 73 番の緒方有希です。福岡市文化芸術振興財団で広報の仕事をしております。よろしくお願いいたします。
- 同じく福岡市文化芸術振興財団の佐野晶子です。
- 115 番の清水永子です。JCDN のアドバイザーと楽の会のプロデューサーで、明日の水上市上アートをプロデュースしています。皆様どうぞご参加ください。
- 伊藤キムです。105 です。よろしくお願いいたします。
- 112 番の河合雅樹です。よろしくお願いいたします。
- 106 番の志賀玲子です。よろしくお願いいたします
- JCDN の水野立子です。この度は皆さん大勢に集まっていたいで、有難うございます。先ほど言い忘れましたが、明日の分科会テーマ別の紙を後でお配りいたしますので、明日参加される方は丸をつけて受付にお出してください。C スタジオとA スタジオを使用して、4 つのテーマを2 テーマづつに分かれて話し合います。参加希望者の数によって島をつくるので、机の数などを決めた

いと思います。なるべく希望を出していただけますようお願いいたします。

- 103 のコンドルズの近藤良平です。よろしくです。
- 104 番の吉村美紀です。福岡市の文化芸術振興財団に勤めております。
- 102 番の栗東芸術文化会館さきらの山本達也です。よろしくお願いいたします。
- 20 番の風姫といます。東京の八王子から来ました。よろしくお願いいたします。
- 追加名簿4番の関係者です。子どものための演劇ワークショップNPO 法人演劇百貨店の制作を担当しております。小川智紀と申します。よろしくお願いいたします。
- 101 番の白井剛です。発条トで活動しております。よろしくお願いいたします。
- 45 番の須藤由起子です。前橋から来ました。お願いします。
- 82 番の山田菜穂子と申します。前橋から参りました。よろしくお願いいたします。
- 109 番の大谷 燠です。JCDN のボードメンバーで、大阪で NPO 法人ダンスボックスというものをやっております。
- 60 番の堤康彦と申します。NPO 法人の芸術家と子どもたちというのをやっています。
- 99 番の砂連尾理 + 寺田みさこの砂連尾理です。
- 100 番の京都市東山青少年活動センターの西田尚浩です。よろしくお願いいたします。
- 伊藤キム + 輝く未来に参加させていただいている、荒木志水と申します。よろしくお願いいたします。
- 追加の 8 番で、伊藤キムさんのところと、大野一雄先生のところに行っています、後藤茂です。
- 12 番の岩田恵と申します。アトリエサードという出版社で一応取締役として色々やりながら、編集者をやっています。よろしくお願いいたします。
- 48 番セッションハウス時悦子です。よろしくお願いいたします。
- 98 番ダンスシアター・ルーデンスダンサーの太田ゆかりです。よろしくお願いいたします。
- 97 番ダンスシアター・ルーデンスの岩淵多喜子です。よろしくお願いいたします。
- 68 番埼玉大学大学院の野村真由美と申します。よろしくお願いいたします。

- 7 番です。三谷幸子と申します。ヤザキタケシ & アローダンスコミュニケーション制作、(株)クラウドディアに属しております。京都からまいりました。よろしくお願いします。
- 42 番の草野京子と申します。京都と奈良の中間にあります城陽市の財団法人城陽市民余暇活動センター、通称文化パルク城陽の事業担当をしております。どうぞ、よろしくお願いします。
- 38 番の島津華生です。学生です。よろしくお願いします。
- 18 番の大橋可也です。よろしくおねがいします。
- 52 番の多根ともみです。よろしくお願いします。
- 追加の 9 番の京都アートコンプレックス 1928 の端野真佐子と申します。よろしくお願いします。
- 63 番の多摩美術大学大学院で学んでおります、並木誠ともうします。よろしくお願いします。
- 追加の方の 4 番にあります。柏木陽と申します。演劇をやっています。よろしくお願いします。
- スタッフをやっております、相川さんのしたでスタッフをやっております。三枝です。よろしくお願いします。
- 京都のアートスタッフネットワーク樋口貞幸と申します。よろしくお願いします。本日は議事の方取らせていただきます。
- 追加の 3 番、ハイウッ드의根木山恒平と申します。発条トの制作をしております。よろしくお願いします。
- スタッフ塾のスタッフの下田です。よろしくお願いします。
- 今回スタッフをさせていただきます、うのあつこです。よろしくお願いします。
- スタッフ塾のアイカワマサアキです。さっき佐東さんがいったように「踊りにいくぜ！！」の照明も担当しますので、テクニカルディレクターとして。よろしくお願いします。
- JCDN 事務局の長谷川綾香と申します、よろしくお願いします。会員の方とは JCDN ダンスファイル等でお世話になっています。
- 同志社大学院総合政策科学研究科に在籍している竹原信也です。JCDN にインターンとしてスタッフとして参加しています。今日はビデオ撮影の方させていただきます。よろしくお願いします。
- 遅れて申し訳ありません、53 番竹井豊ともうします。現在フランスのイルドフロンス地方フォンテニブロでカンパニーをもっていて、一時帰国した際にダンスフォーラムがあるということで、参加しました。

- 66 番ニッセイ基礎研究所の吉本光宏といいます。佐東さんが NY に研修で行っていた帰国する 1 ヶ月前に、僕もセゾン文化財団の助成で NY のコロンビア大学に留学していました。その時大変、佐東さんにお世話になりまして、それ以来 JCDN を応援しています。
- 丹野賢一のマネージャーの松本美波と申します。お世話になっております。昨年度は「踊りにいっくぜ！」に参加させていただきました。またよろしく願い致します。
- 可憐堂のとしおかといいます。音響の方やらさせていただきます。よろしくお願いします。

佐東

ありがとうございました。今回の記録に関してはウェブサイトの方にアップさせていただきます。ご発言なさる時には、お名前を言っていただけますでしょうか。よろしくお願いします。

今回のワークショップというテーマに関して少しお話をさせていただきます。ダンスワークショップというものをダンスフォーラムのメインテーマとして取り上げました理由を話します。

ここ数年の間にダンスワークショップというものが増えてきたように思います。今まではダンサーや振付家の方が自分で企画されるワークショップが多かったと思いますが、最近は地方自治体や各地の文化財団が主催して行われるダンスワークショップというものが増えてきているように思います。ダンスワークショップの形態にしても、たとえば一日だけで終わるものであったり、2-3 日続くものであったり、長期で一ヶ月続くものであったり、様々な形が増えてきました。その中でレジデンシーワークショップに多く見られるように、アーティストが参加者にダンスを伝えるということにとどまらず、同時に地元の人達と一緒に作品をつくるというものが最近が増えてきています。又、ワークショップを受講する対象にしても、子供から大人まで一般対象であったり、学校に行つてのワークショップであったり、多種多様なダンスワークショップというものが増えてきています。ワークショップは JCDN としても積極的にすすめておりますし、全国各地津々浦々までワークショップが広がっていくように活動をしています。

このように環境が発展しつつある中で、それぞれのアーティストやそれぞれの主催者の方は周囲に相談しながら内容を決めていく訳ですが、実際、どういうワークショップが行われているのか、どういう形で行い、どういう効果や問題点があり、どのような成果が生まれてきているのかということをお話したり、話を伺ったりする機会がないので、今回事例報告や話し合う場を作りたいと思いました。

アーティストによって本当に千差万別でいろんな方法論があると思うのですが、その中で参考になること、逆にワークショップの中で最低気をつけなければならないこと、自分がやってみた時どのような問題があつて、それをどう対処したのか、そういうことを今回話し合えればと思います。

1 番はじめは事例報告で、こういうことをやっていますというのを主催者の方とアーティストの方に話していただいて、伊藤キムさんと志賀さんに関しては自分の活動のことを話していただきます。

今後、ワークショップが広がっていくであろうと仮定する中で、もっとこういうワークショップのあり方もあるかもしれない、という提案を出していただくのもいいかと思つています。今の日本の状況を見ていると、社会の方からダンスに求めるものも増えてくると思つし、実際に増えていると思つています。その中で、ここにいらつしゃる方は企画をされたり、実際そういう現場をつくつてらつしゃる方が多いと思つていますが、以前でしたら企画側の考えが先だったけれど、もしかしたら受け元の方が、もう少し多種多様な事をアーティストに望んでいるのではないか。それに対してどうしていけるのか、アーティストにとって、ワークショップやレジデンスの意義はどういうところにあるのか等、いろんな視点があると思つていますが、

ざっくばらんに話し合える場になったらと思っています。

積極的に発言していただけたらと思いますのでよろしくお願いします。

お話をさせていただく方には各 20 分見当でお願いします。質問に関しては、時間的余裕があればその場で質問していただく時間を作りますし、もし無理だったらその後のフリーディスカッションの際に、ご発言いただけたらと思います。

水野立子 (JCDN 事務局長)

JCDN の水野です。まず 5 つの異なったワークショップのお話をお聞きし、次に参加者の皆さんの中にもそれぞれワークショップ・プログラムを実際にやっていらっしゃる方が多いと思いますので、今後どのようなワークショップの発展形というものが考えられるのか、どういう視点を持ってワークショップを進めていきたいのか、というようなことをフリーディスカッションの中で話して頂いて、この場から新しい何か、アイデアや今後の方向性みたいなものが生まれれば良いなと思っています。

基本的にはお稽古事とかクラスなど着地点があるワークショップとは違って、コンテンポラリーダンスの場合は、一般の方もアーティスト対象のものも含め、自分の中にある何か新しいものを創り出していくという、発見していくという事が主たる意義を持つワークショップになっていくと思います。

その辺りの、テクニック向上とか、うまくなるという方向性ではない、新たな価値を探っていくという方向のワークショップを皆さんが目指していく中で、今度どういうものが可能性としてあるのだろうか、ということをお私たちも探していきたいと思っています。そういう新しい方向性が何か一つ二つ結果的に出てくれば良いなと思っています。

一つのアイデアとして思っていますのが、今ここにいらっしゃる方はワークショップがどういうものか想像できると思いますが、「ワークショップをやってみたくて、興味はあるが、なんとなくどういうものかイメージしにくい」という声もあります。手探り状態という主催者の方も多いと思いますので、映像や今日お話ししていただくような、「このアーティストならこういう視点のワークショップがあるよ」というような、ビデオブック、キットみたいなものを作りたいという案が JCDN の中で出ています。そういうことも含めて良い意味でのクリエイティブなワークショップをどのように伝えていくか、広めていくかということも探していきたいなと思っています。

佐東

一つ補足しますと、そういう意味では、いろんなところから要請があって、ワークショップを数多く行われている方と、ワークショップも行ってはいるけれど、なかなか活動を広げるきっかけが少ない方もいらっしゃると思います。なので、ワークショップのマッチングシステム、たとえば自分だったらこういうワークショップができる、これまでこういうことをやった、という自分の行っているワークショップの特色をまとめた情報ブックを作成したり、インターネット上でも情報を公開するなど、そういうシステムをつくるのもひとつの手かな、と思っています。多分そこで起きてくる問題は、この人のギャラは高いけどこの人は安いなど、お金の問題が出てくるかもしれませんが、一律に最低額を決めてマッチングシステムみたいなものがないかと思っています。

今日参加されている自治体の方々、主催者となるの方々には、皆さんのいろんな話を聞きながら、良いアイデアがありましたら考えていただきたいと思います。今回のミーティングで、何か具体的な形をつくっていかうと思っていますので、こんなものがあれば分かりやすいと思う、というものがあれば、それも同時に考えてご発言していただければ、JCDN としては具体化していきたいと思っていますので、是非いろんな角度からご提案下さい。

それでは、映像等の準備を始めさせていただきます。10 分間程度休憩していただき、2 時から始めたいと思います。

..... (10 分休憩)

佐東

それではそろそろ始めさせていただきます。

今回ワークショップの事例報告として、1 番最初にお話していただくのは、発条トの白井剛さんと栗東芸術文化会館の山本達也さんです。よろしくお願いします。

「地域に開かれたアートワークの試み・地域滞在協働創作型アートプロジェクト

さくらダンスワークショップ・パフォーマンス「リビングルーム / さくら編」

(03 年 5-6 月) 白井剛 (振付家・ダンサー / 発条ト) + 山本達也 (栗東芸術文化会館さくら)

山本達也 (栗東芸術文化会館さくら)

みなさまこんにちは。さきらの山本と申します。

最初に、5 分程、私の方から栗東という地域、ホールの説明をさせていただいてその後、ワークショップの経過とだいたいの内容を説明させていただき、その後に白井さんの方から一ヶ月製作をした間のことなど、リビングルームさくら編という舞台作品についてのお話等々含めて進めていきたいと思っています。

佐東

資料に関しては、パンフレットの中に 2 枚ありますので参照してください。

山本

A4 で 2 枚の資料があります。栗東は滋賀県にあります。びわ湖の南に栗東市があります。京都から 26 分電車でゆられて JR の栗東駅の駅前にさくらがあります。

栗東市についてなんですが、現在人口 6 万人の町で、2001 年の秋に単独市制施行で栗東町から栗東市になりました。人口も増加しておりますし、そういう地域であります。大阪まで電車で一時間ということで、ベッドタウンとしての人口増加とか、米原-京都間に琵琶湖栗東駅という新幹線の新駅ができる予定で、新しい滋賀県の玄関口として発展しようというところが栗東市であります。その JR の駅前にホールがあります。

栗東芸術文化会館さくらということで、芸術文化会館という名前もさくらという名前も一生懸命考えてつけました。文化芸術会館とよく間違えられるのですが、文化や芸術の会館ではなくって、芸術文化の会館であるという思いが、わかりにくいと思いますが、そういうことになっています。さくらというのは、日本の古語で、“先んずる”という意味なのですが、将来とか先端とか才気という、ひらがなで“さくら”。これも間違いやすい名前なんで、お見知りおき下さい。

ホールができましたのが、1999 年 10 月 1 日で、3 年と 7 ヶ月ほど経つのですが、その 5 年前の準備段階からオープン、運営まで関わってきまして、3 月までは栗東市役所の職員でしたが、出向してホールの仕事をしておりました。ですが、市役所にそもそも入った理由が、自分の生まれ育った町に

ホールを作りたいということで、市役所に入ったものですから、15年間3月まで勤め退職しまして、今の文化振興財団に移籍させていただいたのがこの4月であります。その真っ只中でこの企画はやってまいりました。

オープンしてから3年7ヶ月。いろんな複合施設ではなく、大800、中400、小が200(キャパ)ということで、クラシックと演劇ホールと実験スペースという3つのスペースを持っています。あらゆる舞台芸術のジャンルを総てやっております、今回はダンスの企画で報告させていただきますが、ダンスだけをやっていこうというホールではなく、全てやった上で、ダンスまでやっていきたいと、そういうニュアンスが伝わるかどうかなんです、そういう感じで考えております。

なぜ、ダンスかということですが、さきらの建設準備が始まってからいろんなものを見たり聞いたり勉強していく中で、先程の自己紹介の時にもいらっしゃいました大谷さんのところのDANCE BOX企画で数多くダンスをみせていただいた影響も多くありますし、佐東さん水野さんと知り合ったところからの興味もあります。ダンスの公演であったりワークショップであったり、総ての舞台芸術表現に身体表現がまずあるんじゃないかということや、単にダンスを見たりしている時の自分の心地よさだったりもします。それでダンスがやりたいなと思いつつ、今年になって“ダンスミッション”という小ホール・小実験スペースで見る企画とともに始めました。ダンスワークショップの企画は一年半前から始めてきたということになります。

そろそろ今回のダンスワークショップ・パフォーマンス リビングルームさくら編のことを話していきたいと思います。白井さんと根木山さんが3年前の4月にさきらにやってきて、リビングルームの地域バージョンをつくる可能性という話が盛り上がりまして、それまで私は発条トの作品も見たことがなかったんですが、ダンサーとかアーティストであるということよりは、白井さんの人間的な魅力というか、すんなり打ち解けられるところがあり、私自身と合うんじゃないかと思いつつ、具体的に話を始めました。それが2001年の11月から2002年の5月、10月、2003年の11月と、一週間づつ白井さんに滞在させていただいて、4度のダンスワークショップを行ったものです。

その中身としては、一週間連続ということで、平日の昼間、学校のある時間帯が一番難しい点で、学校の教育委員会とか、校長先生とのつながりの中で作っていったものもありました。丁度2002年度から週休2日制になり、学校側の受け入れ体制の立て方が難しかったのですが、平日の昼間については学校の授業の中でダンスワークショップをずっとやってきまして、延べ小学生400名程度に各クラス単位でダンスワークショップをやってきました。

平日の夜は一般の募集をして一般の方のダンスワークショップを行いつつ、さらに土日を利用して、地域探検ツアーということで、住んでいる場所の魅力を探しに、地域に1回出てみよう。住んでいても歩かない路とか、出会えない自然とかいろんな出会いがあるんですが、地域の方も地域でない方もとりあえず、外に飛び出して歩いてみようということで、地域探検ツアーというのも一回やってみました。

(映像を見ながら)

これは、2002年の5月にやった時の映像ですが、私自身も知らない、ちょっと路地に入ったところに情緒のある小道があったりとか、これは何なの？という記念碑があったり、普通にずっとやっている床屋さんの店の前の風景がすごく魅力的であったり、神社の様子とかが映っています。

その後、5月に演劇をテーマにしたフェスティバルをやっているんですが、その中のデモパフォーマンスということで、フリーマーケットなど、一般的な賑わいのあるフェスティバルの中に白井さんが飛び出していったり、その週に小学校のワークショップをしましたので、子どもたちが遊びにきたりというようなことがありました。

その4回のワークショップを始めたときは、ダンスミッションを将来始めるための観客作りということ

もありましたし、“リビングルームさくら編”の公演というのがどうなのかなという疑問もありましたが、そう思いながらもワークショップから始めようということで、何年かかっても公演にたどりつけなくてもワークショップだけでいいやという感じで始めたんです。とはいえ、先週5月31日と、6月1日にそこにたどり着きまして、終わったほやほやです。“リビングルームさくら編”という舞台作品をつくる為にダンスワークショップ、出演者を決める為のオリエンテーションを兼ねて、4月にワークショップ5を行いました。それから4月の29日から6月1日まで、ほぼ一ヶ月間が具体的に“リビングルームさくら編”の製作期間になったということです。

それまでも一週間づつホテルに住み、泊まりながらの滞在ではあったんですが、1ヶ月となると経済的なこともありますし、できれば“地域人”になって欲しいということで、白井さんの住む家を募集しますということもチラシには書きまして、地域の方々とのつながりが生まれればなということで、結局、3DKの賃貸アパートを安く借りました。そこがアートワークの現場になったり、みんなが泊まりに来て、ミーティング会場になったり、いろんな場所になったんですが、そういう1ヶ月がありまして、その1ヶ月の風景の中身が(レジュメ)2枚目にあります。

“日々の企画”。これは、舞台作品をつくるということよりはダンスワークショップの1ヶ月バージョンをみんなでやろうかということで、29名の応募がありました。でも結局全員出演したいということで、大人数なのでどうなることかという思いもありましたが、最終的に全員舞台にも立っています。この“日々の企画”というのは、展示スペースがさくらにありまして、休館日以外はみんなが集まってきて、毎日何かが行われる。もちろん舞台作品のためのワークショップとか制作稽古ということもあるんですが、1ヶ月間さくらがアートワークの現場になったというのが、展示室で象徴されておりました。そこに、いろんな展示であるとか、今までの写真の経過説明であるとか、ビデオを流したりしながら、一般の方々に説明をしたという事があります。

それから、地域と関わる企画なので、祭りの取材というのもありました。栗東では、毎年5月に一見地味なお祭りとか、少し派手なお祭りとかたくさん地域の祭りがあるので、取材に行くことで、ふれあいながら、栗東の人も栗東の祭りを知り、26人のうち、ほぼ半分が滋賀県内の方で、それ以外の方は京都・大阪の方だという編成だったんですが、栗東以外の人は栗東以外の人で、ひとつの地域の、ひとつのお祭りに参加してみたということです。

それから田んぼワークショップというのがありまして、これも季節柄田植えシーズンであるということと、水田でのダンスというか、水田に入って何かやるのはおもしろいなというのは前から思っていて、雨の中でしたが水田に入りまして撮影もしまして、そういう経験をしました。

それから、作曲ワークショップまでしてしまおうと、メンバーがいろんな個性のある人が集まりましたので、リビングルームのワルツというもともとある曲を参加したメンバーで音をとって作曲してしまおうという、3日間で作曲のワークショップをやりました。

それから今見ていただいている、発条トのホームページにある、“情報掲載”もこれ自体も“日々の企画”のひとつであるかなと思ひまして、全員がメンバーリストの中で、やりとりしながら、それぞれの思いとかつぶやきなんかをホームページにも載せていったという経過があります。

ではここで白井さんに。

白井剛 (振付家・ダンサー/発条ト)

発条トの白井と申します。だいたい全体の企画については今山本さんからお伝え頂いたとおりなんですけど、そんないろんな経験をしつつ、1ヶ月間滞在をして最後に“リビングルームさくら編”という作品を公演として打ち上げました。400人収容の中ホールというところで行いまして、(ビデオ映像を見ながら)僕は、ワークショップ企画のプロジェクトリーダーという名前ではあったんですけども、主に今

回この舞台バージョン、舞台にまとめることの演出役というか、それ以外の活動、`日々な企画`や田んぼワークショップなどは、それぞれ独立したプログラムとして動いていて、それらを経過して、作品にまとめるというのが僕の役目でした。先程の田んぼに行ったり、神社のお祭りを取材したりというふうに、いろんな風景の中で散歩がてらというイメージもあるんですが、舞台上に撮影した風景を出しつつ、その前で踊るとというのが、“リビングルーム”という作品です。

“リビングルーム”というのは発条トで1度バニョレ国際振付賞をいただいた作品で、このようなスクリーンを後ろにおいて、その前でパフォーマンスするという作品なんですけども、当初こんな風にワークショップとして広がりを持つとは考えてなかったんですが、いろんな場所の景色を使って、いろんなその場所の人と作り始めれば、その地域バージョンがなんぼでも出来るんじゃないかという発想で、プロデュースの根木山とかと活動を始めまして、山本さんに出会って実現した企画です。

(今回は)総勢27名舞台上に乗りました。舞台上には乗らないけど、一緒にやった人は29名ぐらいいます。1番若手で10歳から、年齢教えてくれないけど、高3の娘がいる多分40から50ぐらいのおじさんがいましたが、僕としてもこんだけの人数や年齢層を使うのが初めてだったのでチャレンジでした。結果的にすごく世界観が広がることになって、舞台としては説得力のあるものになったのではないかと、自分では満足しています。映像は、さきらの練習室から、近所の田んぼですとか、山の方とか、道路とか、市役所の前でロケを敢行したりしました。

(映像を見ながら)

舞台を横切るだけというシンプルな動きが一番迫力があって良かったですね。先程顔がちらっと写りましたけど、舞台上に生のカメラが置いてありまして、生のカメラと記録されてきた映像ということで、それと映像にならない生の舞台上の身体という、それらに対比させて、最終的に、舞台上の生の時間、現在の時間、ひいては劇場空間にいるお客さん自身の身体っていうのに導いていくっていうのがこの作品のコンセプトです。その大粋なコンセプトと、全体の構成自体も“さくら編”ということで、新しい人達に会えば考え方も変わるのかなと思ったんですけど、大体の起承転結はオリジナルバージョンの“リビングルーム”とほぼ一致するようになっています。ただ、その中で出てくる風景も違いますし、それぞれの踊り、個性、モチーフもそれぞれにつくってもらいまして、最終的にワルツという曲、先程作曲ワークショップと説明いただきましたが、3拍子の曲ということだけを課題として与えて、普段僕らと一緒に活動している栗津裕介というのを“さくら”まで呼びまして、一緒に作曲し、それをみんなで踊るというシーンが出来あがりました。またこの企画自体がいろいろな場所での可能性があると思っていて、今後具体的にまた別な場所でやるという企画は動いてはいないんですが、そうなった場合にまた別な場所のワルツというのができて、その場所の踊りというのでできるのかなと思っています。

そういった風に土地と人とのつながりが自然に出てくる作品ではあります。お祭りの取材というのもさせていただいたんですけど、お祭りというのは、その場所でその場所の人達から生まれたもので、そういったものを取材することで何か参考になるのではと思いました。

これはまあ、取材の風景ですね。(映像)

公民館で練習したり、あとは、練り歩いたりしていました。かなりすごい盛り上がりを見せるお祭りもあれば、こじんまりしてるんだけどすごく落ち着くのもあり、両方体験させてもらえたんでいいなと思いつつながら、具体的にそれを何か振りに起こすということはしなかったんですけど、良い体験になりました。

佐東

そろそろまとめの方を。

白井

参加者皆さんに一個一個モチーフをつくってもらって、それをいろんな場所で撮影してきているんですけど、何かある場所に行ってある行為をして、動物のマーキングみたいに。それは記念碑を建てるというテーマだったりもしたんですが、ある場所で行う行為をして、それを重ねていって、舞台上でも同じ行為をするという経験をしてもらいました。

そういうことで、時間とか場所の一瞬一瞬というのをいとおしく感じてもらって、その過去の自分と現在の自分というのを対比してもらって、舞台上で貴重な体験してもらおうというのがコンセプトなんですが、そのようなことが、すごくダンス的なのではないかと僕は考えていて、それがただ単に僕の考えでは無くなっていったんですけど、みんなとそういう気持ちも共有していくこともできて、最終的にはこの企画というのは一ヶ月間すごい短かったんですが、お祭りのごとく一ヶ月がすーっと過ぎていった感じです。その中でいろんな時間を共有して、それぞれに自分の体験というのを貴重に感じつつ、自分の身体を振り返る機会になったのではないかと思います。

僕としても今後、アーティストとしてだけでなく普段生きていく中で、何かすごく大きな体験をさせてもらったというのが実感としてあります。もし何かの機会があればこの作品を見ていただきたいです。

ありがとうございました。

山本

ありがとうございました。

佐東

ありがとうございます。白井さんがなんか栗東に引越されるというウワサを聞いたんですが、それは本当ですか？

白井

いや、今のところ予定は無いです。土地も安いですし、稽古場も豊富ですし、環境としては気持ちが良いです。東京はダンスをやるににくい環境ではあるけれど、やっぱり刺激もあるというのも改めて感じました。

佐東

以前に仙台で白井さんが10日間ワークショップをされて作品を作ったのをJCDNがコーディネートさせていただいて見たんですけど、その土地の映像とか、その土地の風景とかその土地の人が一緒に写っているというのが、とてもこのリビングルームのシリーズはおもしろいですよね。

白井

そうですね。

佐東

またフリーディスカッションの時に話をさせていただきます。

白井さんと、山本さん、テクニカルで制作の根木山さんでした。

では続きまして、福岡市文化芸術文化財団の吉村さんと、コンドルズの近藤良平さんです。

「アーティスト滞在型ワークショップ・参加者との作品発表まで”ダンスジェネレイト福岡”の試み」
(03年1-2月) 近藤良平(振付家・ダンサー/コンドルズ) + 吉村美紀(福岡市文化芸術振興財団)

吉村美紀 (福岡市文化芸術振興財団)

福岡市の文化芸術振興財団の吉村です。今回は、財団が催しております事業の中から、ダンスジェネレイト福岡という長期に渡るダンスのワークショップに関して報告させていただきます。流れとしては、結構盛沢山の内容のもので、順番に説明していきながら、近藤さんにとりどころ、その時感じた感想などを聞きながら進めていきたいと思っております。

まず、私共の財団は1999年の3月に創設されて、それ以来、コンテンポラリーダンス、パフォーマンス、パフォーミングアーツというものを単発的にワークショップなどで開催してきました。2001年ごろから、福岡では余り公演を見ることが出来ないのですが、よその地域ではコンテンポラリーダンスというのは随分おもしろいものだと聞いておりまして、そういうものを福岡で新しくやってみようかということで始まった事業の一つです。

ダンスジェネレイト福岡を開催するにあたって、地域創造からの助成金をいただいております。今回の長期ワークショップの最後には、参加者全員で、発表公演をするということで、発表公演の部分で芸術文化振興基金の助成金をいただきすすめてきている事業です。

先ず2001年に第一回目が催されたのですが、その時には、講師に日玉浩史さんをお招きして、約一ヶ月に渡るワークショップを開催致しました。その後、2002年には、コンドルズ主宰の近藤良平さんをお迎えしたわけですが、なぜ近藤さんを選んだかという理由に関して少し説明しますと、1回目のワークショップも本当に福岡の人たちにはまだ目新しくとても新鮮な内容だったということがあるんですが、まず、近藤さんに関しては、福岡で定期的にすでに公演を行っていて、わりと観客で見に来ている方も多かったということです。私たちの方もコンテンポラリーダンスというものをもっといろんな方に知ってもらいたいし、公演を観てこういふのだったら私もやってみようという人たちが自然と参加できるような、そういったものをつくっていきたくったというのがまずあります。そして、参加者の人たちには、よくコンテンポラリーダンスと聞くと中には難しく考えてしまう人もいらっちゃって、近藤さんのダンスの特徴として私が印象にもっていたのは、とても楽しくみんなが踊っているという印象を受けていましたので、そういった楽しさをまず身体で感じてもらいたい、というのが理由の一つです。それにダンスだけでなく、いろんな人たちに参加してもらって、ジャンルに囚われたような閉塞感が無いように、いろんな人達の要素みたいなものがダンスに反映されればというふうにとりかかっていたわけです。

そういったところから近藤さんに来ていただくことになりまして、ダンスジェネレイト福岡2002は、近藤さんに福岡で約27日間滞在をしていただきました。その中で、講師によるデモンストレーション公演とトークという形で、その講師がどういったスタイルでダンスをつくっているのかということ、参加者の人も合わせて一般の方に見ていただくという機会を設けました。お渡ししているレジュメの中にも書いてありますので、それを参考にいただければと思います。

デモンストレーション&トークで始まり、長期のワークショップと続きますが、ワークショップ参加者の選考としてオーディションを開催しました。オーディションを実際受けに来られた方が48名いて、参加者15名ということで募集をかけたのですが、最終的には参加者20名になり、なおかつ近藤さんからできればそのオーディションにきていただいた人達にもなんらかの形で最後の公演に協力してもらえないかということで、オーディション選外の返信をするときに再度発表公演時になんらかお手伝いをしてもらえたらということで声をかけ、それに賛同していただけた方13人が最後の発表公演で

ステージに立つという、そういったものを急遽設けたりしました。

長期のワークショップが終わりまして、練習の成果の発表というのを最後に設けるのですが、その発表公演に合わせて参加者の皆さんも会場の皆さんも一緒にダンスについていろいろと自由に話し合えるような場所、ラウンドフォーラムというのを設けてこの長期に渡るワークショップというのは一通り終わるわけです。

それとはまた別に近藤さんが福岡に 27 日間滞在してくださっている間に、長期のワークショップだけでなく、もっと多くの初心者の方でも気軽にコンテンポラリーダンスを体験していただけるプログラムということで、短期のワークショップというのも合わせて開催致しました。それにも多数の方に応募していただいたんですが、それともう一つ、より間口を広げるといって、小学校の方にも近藤さんに授業で出向いていただきワークショップを行いました。全部で、長期ワークショップ中でのデモンストレーション&トーク、ワークショップ、発表公演プラス短期のワークショップと小学校への訪問といった内容になります。説明が長くなったんですが、映像を見ながら話をしたいと思います。

(映像)

これが最初のデモンストレーション&トークというもので、近藤さんのいわゆるダンスの創り方というのを、このときはコンドルズのメンバーの方が全員で5名いらっちゃって、ステージの上で、みなさんにダンスというのがどういった形でつくられていくのかというのを丁寧にコメントをつけながら紹介いただきました。

近藤良平 (振付家・ダンサー/コンドルズ)

普段の講演ではほとんどしゃべらないんですけども、今回はがんばりました。

吉村

これも、コンタクトというスタイルの説明を加えながらパフォーマンスをしていただくという。

近藤

僕もたまたま楽器が好きなんで単に弾いているだけで...

吉村

その説明をしていただいたあとに、今回応援に来ていただいたコンドルズのメンバーの方と、最後に小人数での公演をしてもらいました。

近藤

このデモンストレーションのすごいところは、デモンストレーションなのにこんなに照明をいれてくれたんですよ。これはちょっと珍しいですね。スモークまで炊いて。こっちは手が抜けないなという感じでした。この時は、

吉村

これがデモンストレーションの様子でした。この後トークというのがあって、そこでは今回コンドルズの方と近藤さんと私とで、コンテンポラリーダンスとは？ということや、ダンスの作品をつくっていく上で話をさせていただいたわけです。

これは長期のワークショップでの様子ですが、ほぼ4週間のうちの前半半分をアシスタントの鎌倉さんに来て頂き、そのときは、鎌倉さんが太極拳などを教えてくれたりしてそれをまた最後の発表公演

に盛り込んでいく形になりました。

ワークショップの会場なんですが、これは福岡市の施設の一つで演劇と音楽の練習場ということで、大・中・小の練習室があるんですが、このときは、一番広い練習室を使って練習しました。

そしてこれが、全部で21日間のワークショップを終えて最後の発表公演の様子です。これも練習のときに使っていた第2練習室、Bルームを会場にして発表公演を行いました。

この映像の作者はオーディションを受けにきたんですが、残念ながらその時は選考に漏れてしまった方なんですが、たまたま映像の勉強をしているということなので、そのあたりを協力頂いて、こういった映像をつくっていただきました。

これが発表公演の様子で参加者がオーディションで選ばれた20名、それプラス13人の方で、総勢33人のステージということになっています。

近藤

先程も言ったこの練習場所でずっと練習ができて、その場所でリノリウムを引いて、客をコの字型に置いて、やりました。これはある意味ではかなり贅沢で、僕たち普通練習は違う場所で行いますんで、多分本人たちもこういう舞台になるとは、最後には分かったかもしれないですが、最初の練習の時には、この場所でこういう風に人が集まって見せるというのは分かってなかったと思うんで、その快感はあったと思います。

それから、客もどちらかというと、コの字型で距離が近いので、楽しむ内容を最初からつくりかかっていたんですが、かなりそれは伝わったんじゃないかなと思います。

それから、ここもBルームという場所で普通の練習場なんですが、照明がそんなに入れられないんで、ムービングなんぞをいれちゃって、かなり光の光量も増やしました。たぶんそれもそんなに普通にできることじゃなく、福岡市文化芸術振興財団のおかげというのもあり、その結果雰囲気的にとてもぎやかな感じに出来たと思います。

吉村

そうですね、たしかにライトとかは凝っていたと思います。最後に発表公演を2日間行ったんですが、その分には、芸文助成とアマチュアの芸術振興のための助成金がつきましたので、それで割としっかりしたものに出来ました。

これが長期ワークショップの全体の様子なんですが、この間に行われた小学校でのワークショップの映像も持ってきていますので、せっかくなのでお見せしたいと思います。

小学校は全部で3箇所行きました。財団の事業の中で、いろいろな市内の地域に出向いてワークショップを行うという事業がありまして、その中の一環にも関わるものでした。財団の方では、他のワークショップでも小学校の方に出向いて様々なワークショップを行っていますが、その中で今回のこのダンスジェネレイトの講師も実際に小学校に行くというものをやってみました。

このときは宮竹小学校という福岡市南区の学校なんですが、小学校4年生を対象に全部で159名という生徒数でした。ちょうどデモンストレーション公演で他のコンドルズメンバーの方も来て頂いていた時期だったので、メンバーも小学校に行ってください、大サービスなワークショップになりました。子ども達も大はしゃぎで楽しんでいました。ひとりで動くよりも、誰かに支えてもらって動くともっと大きな動きができるという、ダンスの基本的な動きをやっていただきました。

近藤

こっちの出演者がかなり疲れましたね。思った以上に大変で、かなりへとへとになっていますよね。

(映像)

吉村

これで映像は全部です。こういった形でダンスジェネレート 2002 というものが一つ完結しました。

今回のワークショップを開催して思ったことは、参加者の皆さんがこれを機会に今でも結構綿密にネットワークを取り合っているというのがみられます。たとえば、福岡の中では、北九州市にも芸術文化振興財団というのがありまして、「シアタープロジェクト」というプロジェクトの中でコンテンポラリーダンスのワークショップが行われていまして、そちらの方と情報交換をしながら、今後福岡でどういうふう
にコンテンポラリーダンスをしていこうかという話をしていたり、参加者が主催する公演をお互いに観にいたり、参加者の中には芝居をやっている人もいまして、もちろんダンスをやっている人もいるのですが、それぞれが、それぞれのステージを観に行くようになってきました。参加者の中にはダンスの先生もいましたので、そこのダンス教室に通って日々もっと技術を磨いているような人もいますし、今度行われます JCDN 主催の「踊りに行くぜ！！」に積極的に参加するように作品創りをやろうという動きも見られます。

まだ始まったばかりの事業ですけれども、これからも続けていく方向で進んでいまして、今後ダンスの作品をつくる上で、福岡でこういったことが必要なのかということも主催者側で吟味をしています。やっぱり地方都市ですので、地元の企業やスペースを持っているところとか、学校も小学校だけでなく、大学とかとの連携も含めて、地域が一体となって活動していけたらというように考えております。実際福岡でコンテンポラリーダンスというのを積極的に取り組んでいるホールもありますので、そういったところとうまく連携しながら、ダンスを観る人達とダンスを制作するつくり手側の人材をバランス良く育てて行けたらと思います。そういう環境づくりに少しでもダンスジェネレートが貢献できたらなと思っております。

今回、このような事業をやったことで、東京で事例報告という機会に参加させていただいたことに感謝しております。

佐東

僕もこのワークショップに関わっていまして、その中で思ったのですが、コンテンポラリーダンスのワークショップはいろんなやり方があるとは思いますが、近藤さんの今回のワークショップは“動きを立ち上げていく”“ダンスをどう踊っているのか”というところに重点がおかれている。振りをどんどんつくっていきながら、その振りが最終的には全部自分達のものになっていく。客席から見ていて、こんなに楽しそうな人がこんなにいっぱいいる空間というのも珍しいなと思ったんですけど、そこらへん、近藤さんがワークショップされるなかで思っている、こういうワークショップをつくりたいという部分を手短にお話し頂けたら。

近藤

はい、個人的には、今回のワークショップは涙がでる程楽しくて、非常に嬉しくて最終的には運動会を見守るお父さんのような気持ちで、親身になってしまいました。そこが非常に良かったんですが、ちょうどたまたま僕の前にワークショップをやった日玉浩史君の作り方も知っているんで、できるだけいろんな方法を取りたいというのと、あと僕も個人的にどちらかというとおちゃらけな人間で、楽しい内容の方が得意なので、それを特性とっていただければそれを活かそうと思い、できる限り動いてなんぼで、考えるなという感じにしました。考えないで動くことを優先して、とにかく動いて動いてからあとでちょっと考えようみたいなところで作品をつくりました。

それと、東京(以外)にいて、これだけ同じ場所にいたのはじめてなので、練習場所といい、ウイークリーマンションから自転車で通うという非常に楽しい思いをしました。それは、ありがたい場でした。

佐東

ありがとうございました。今ビデオに写っていなかったんですけど、最後の公演の半分以上は近藤さんがグランドピアノを 2 つ使って、二頭立てのグランドピアノの演奏と、ギターと唄と、ほとんど生演奏で行ったものでした。

一つだけ、これに関連して、福岡市文化芸術振興財団のお知らせがあります。

佐野晶子 (福岡市文化芸術振興財団)

今報告した吉村の同僚の佐野です。

ワークショップはほんとうに大成功で、近藤さんもコンドルズのみなさんも素晴らしかったです。そのワークショップのコーディネーターとして同じように佐東さんに福岡に滞在していただいたご縁で、今年度の事業で、ダンスに限らず演劇等も含めたプロデューサーを生み出していこうという事業を私の方で企画して、その講師の 1 人にまた近藤さんをお招きしています。

全部で 7 回のセミナーをやるのですが、いろんな観点からプロデューサーに必要なものの考え方や実務はどうしたらいいかなど、半年かけて行います。佐東さんにメインのコーディネーターで全部ついていただいて、第 2 回のセミナーで、近藤さんと勝山さんというコンドルズの方にお二人で、アーティストから見た制作者の重要性というお話をしてもらおうことになりました。今年もどうぞよろしく願います。

佐東

時間が長くなってしまいましたが、コンドルズの近藤さんと、福岡市文化芸術振興財団の吉村さんでした。ありがとうございました。

つづいて、砂連尾理+寺田みさこの砂連尾さんと京都市東山青少年活動センターの西田さん、よろしく願います。

「1994 年より毎年連続して行っている初心者向けのワークショップ～参加者発表公演まで」

砂連尾理(振付家・ダンサー/砂連尾理+寺田みさこ)+西田尚浩(京都市東山青少年活動センター)

砂連尾理 (振付家・ダンサー/砂連尾理+寺田みさこ)

こんにちは。砂連尾理です。

私は京都からきました。最初の 2 組を聞いていいなと思ったのは、プロデューサーがそれぞれダンサーに惚れ込んで話を依頼しているんですが、それとは私たちはちょっと違ってまして、僕に話を振ってくれた時に、僕らの作品を観た事もなければ、なんで選んだかというのを伺った時も「なんとなく」という返事しかもらえなかったんですね。「ダンスに対して私は関心がないです」とも言っていました。だからここで喋るのは、どういう風に私たち二人が「ダンスパフォーマンスワーク」というプログラムをつくってきたか、私は京都に住んでいましたので、京都にいる施設の人と市民がどういう風につくってきたかをお話します。

このダンスパフォーマンスワークというのは、だいたい秋から 3 月の末までおよそ 6 ヶ月間、週に 1

回ワークショップをしています。ダンサーの経験者は基本的には無しで、演劇などの経験はあっても、ほとんど表現活動は初めてという人を対象にしよう。その辺の詳しい説明は、また西田さんの方からあると思います。今年で10年目で、一応この10年を区切りにしようという形なんですけれども、やってきて感じた事、そこから見えてきたことというのが、今日来られているダンサーやプロデューサーの方に何かお役に立てれば良いなと思ってお話をさせていただきます。

初心者を対象にするワークショップですので、ほとんどの人が「何か動いてください」といってもあまり動かないんですね。ダンス、身体を動かすということが非常に程遠い人ばかりなんです。一応プログラムとしましてそちらに書いてありますけれど、これも10年かけて、だいたい前半の10回で、このような自己紹介ダンスから始まって一連のしぐさをもとにつくるというようなプログラムをつくってきました。

こういうをつくるのが可能だったのは、私が中京青年の家、今は中京青少年活動センターといいますが、そこで練習する一利用者だったんですね。そこは水曜日が休館だったんですけど、だいたい土日を除いた月火木金に、西田さんとお話をする時間があったんです。この西田さんが職員の割には非常に仕事不熱心な方で、僕とだいたいいつも二時間ぐらい哲学の話とか、ちょうどその時僕が失恋してたんで、その傷を癒してもらう話とかいろいろやっていました。

そこから見えてきたことというのが、やはりこの社会の中で、学校教育の中にも思い当たる点があると思うんですが、身体を感じる時間というのが非常に少なくなってるんだらうなということが見えてきました。はっきりした事は分かりませんが、去年広島の小学校にワークショップに行ってちょっと驚いたことは、池田小学校やあの兵庫県の事件があって以来、学校関係者に、ものすごく分厚い門を感じるんです。なるべく問題を起こさないように、学校側もあまり厳しい先生もいなければ、あまり問題を起こさないような指導をしてるんじゃないかなと2人で週4日ぐらいタバコを吸いながら喋って、見えてきたんですね。

その中で、このワークショップをじゃあどういう形にしていこうかという風に思ってみると、身体というものをどういう風感じていくか、というのを入り口にしていけばとりあえず役割は果たせるかなという事を、2人で考えました。

最初の2年間は、ぼくも一応モダンのテクニックをやっていたので、そういうモダンのメソッドを教えるようなことから発表会をしようかなと思っていたんですけど、やはり型というのは、かなり時間のかかることだし、西田さんの方が必ず発表して欲しいということだったので、それがなかなか難しかったんですね。そこからじゃあどういう風につくっていこうかと考えると、都市ってというのはいわゆる脳化社会というか、どんどん自分の頭の中でこういう風にしよう、こうするためにこういうミスがあったらこれは省いていこうっていうようなものだと思うんですね。それで僕らが幼い時どうしてかたかという、やはり家の前で遊んだり、身体を使って遊ぶというのが非常に多く、そういうところから学んできているんじゃないか、なるべく遊びに近い題材を元に、みんなで家の前で鬼ごっこや缶蹴りをしたような感覚でダンスをつくっていくということができないかなって、そういうことを思っていたら、丁度佐東さんたちが招聘していたイスラエルのヴェルティゴというカンパニーが、やはり小学校でダンスを教えている中の題材に、自己紹介ダンスだとかいうのをやっているというのを聞いて、そういうのをどんどん入れていったりとかしたんです。そういう遊びを通して、ほんとに些細な動きを通して、ダンスを立ち上げるというか、自分の身体について自覚をはじめるといようなワークショップをしよう2人でやってきました。

どういう形で練習して発表したかというのをビデオで見てもらいます。

(映像)

基本的に練習はグループワークを中心にやっています。

私と寺田がいますが、必ずそのグループワークの中で、対話というのを中心に...それは甘いんじゃない

ないかという指摘もありますが、なんせ初心者ばかりなので、自分の身体に対して自身をもたせるようなところから大体スタートしています。

ご覧のように、そんなにダンスに慣れている人達ではありません。こういうことを前半の10月から12月にかけてやっていくうちに、みんなが踊りをつくることがこんなことでもいいんだという空気が12月ごろに出来あがってきます。そこからはみんなで自主的にダンスをつくっていくような感じです。この人たちは様々な職業を持った人達です。料理人やフリーターの人とかですね。

これは発表公演です。スタジオというか、大会議室みたいなところでやっている発表会です。選曲なども受講者が選んでいます。最初は動けない人たちがばかりでした。人前で練習をする際も鏡を隠してくれ、部屋を暗くしてくれというような人がほとんどです。照明などもほとんど凝ったこともしないで、舞台美術も自分達が考えてやっています。

私たちのワークショップというのは、基本的には自分の身体を自覚して、その自分を今度はダンスワークショップを経て、自分が社会とどうやって関わっていくかということを模索してもらう、というのを主な目的としています。ですからこのワークショップが終わって以降もダンサーとしてやっていこうというような人がまだ余りないことはたしかですが、私が京都に住みながらプロデューサーとの蜜な関係から生まれた一つの例として紹介しました。次は西田さんの方から。

西田尚浩（京都市東山青少年活動センター）

東山青少年活動センターの西田と申します。よろしくをお願いします。

砂連尾さんが予定通りこないの、後をどうやって繋いだらいいか分からないんですけど...とりあえず10年ほどやっていると、だんだんと昔のことを忘れてしまっていて、とりあえずやり始めて3年目が一つのターニングポイントだったことは間違いのないと思います。

3年目にかなり、「プログラムをどうするか」というのを毎日会っては2時間ぐらいタバコを吸いながら話をするという感じでつくってきたと思うんですけども、そのうちにだんだん「ダンスって何の役にたつんやろう」ということを考えだしまして、確かにこのダンスの催しは楽しくっていいな、と思うんですけど、何の役に立つのかなと自分の拠り所が欲しくて調べてみたいという気になって、アンケート調査を3年か4年ほど続けてやってみたんす。最初は活動センターというのは、お花の講習会であるとか、書道の講習会であるとか、そういうことを延々とやりつづけてきて、全然利用者から相手にされなくなったという施設だと思うんですけど、ダンスとか演劇とかをやり始めてから、若干そういう教室も残っていたんで、たまたまお花の講習会とエアロピクスの講習会と演劇とダンスで比べてみたんですね。

そうすると分かった事は、なかなか違いはそんなには見つからないんですけど、やっぱり満足感が全然違う。演劇の方は最後に公演をしますし、ダンスも最後に公演をしますし、なんかみんなで協力して共同作業をしますよね。だからその辺の満足感が全然違うというのは確かにみていてそうだなと思うんですけども、若干その中で一つ不思議だなと思ったのは、「自分が情けなくなる、嫌になる」というのがお芝居とかダンスをしている人の方が甚だしいんです。結果としてダンスをやると、あるいはお芝居をやると、益々自分が嫌になって情けなくなるという答えが出たんです。

これはなんでかな？とっているいろいろ考えているんですけど、その答えは演劇の方と、ダンスの方と混じっているんですけど、演劇の方はそんなにテンションが下がっていない。ダンスの方がより下がっている。ダンスをやると、より嫌になって情けなくなるという答えが出たんです。

よくよく考えてみると、先ほど近藤さんのお話にもあったんですけど、とりあえず動けという風にはやってないんで、よく考える、身体をよく認識しなさい、というそんな感じで我々はやっているんで、多分突き詰めてこの不自由な身体というのと真剣に向き合っているんだと思うんですね。そういう作業というのが多分しんどいんだと思うんです。

そういうことの反映かなと思っているんですが、(レジュメの)下の方にもうひとつグラフを書いているんですが、人とのつながりを持っている人、あるいはつくれた人というのはLSとHSと書いているんですけども、LSというのはローサポート、サポートが低い、HSというのはハイサポート、サポートが高いという、そういうグループに分かれてるんですが、やっぱり人とのつながりを沢山もっている人の方が満足感が高いという答えが出ているんですね。だから自分と、つまり不自由な身体と向き合うという作業で苦しいんだけど、仲間と一緒に手をつないで充実感のある人は、やっぱり満足感が高いという、その通りかもしれませんが、そんなことが分かったということです。

最近参加者の感想を丁寧に聞いていると、だいたいダンスパフォーマンスワークは半年間やりますので、半年間で一番印象に残った感想というのは、「終わればものの見方が変わった、ものの捉え方が変わった」という人が沢山いるんですね。幅が広がったとか、そんな方が沢山いました。多分、世の中とか世界を認識するのは、自分の身体を通じてだろうと思っていますので、そういう身体を動かすようなこと、意識してみること、若干自分と向き合う作業を試みる、という後では何か認識の仕方が変わるということがあるんじゃないかと思っています。

私はユースサービスというところにいますので、青少年の育成ということで動いているんですが、健全育成とは違うんですね。健全育成というと、なんとなく保護したりだとか、危険なことから遠ざけたりとか排除したりとか、そんな感じなんですけどむしろ逆で、自分の興味・関心のあることを突き詰めてやろうよ、という感じでそれを応援しようというような施設です。その中でダンスをする人はダンスをするし、社会体育が好きな人は体育をやったり、国際交流とか、ボランティア活動とかやったりしているんですが、東山では今のところダンスとか演劇を表立ってやっています。

そういう自分の興味のあること、感心のあることをちょっと突き詰めてやってみてその中から出会ういろんな困難とか、人が成長していく中でいるんなステップがあるんだと思いますが、おそらくダンスには、そういう人を変えていく、あるいは成長させていくプロセスといいますが材料といいますが、そんなことが沢山提供できるんじゃないかと思います。

そういうことを思いつけながら、1年終わってから、最近あんまり反省会していませんけど、最初のころは1年終わってから必ず反省会をして、来年どうしようという話をつづけながら今年で10年目ということです。

砂連尾さんの教え方というのは非常におもしろくて、とりあえず「何故その動きしたの？」って聞くんですね。動いた人はそれをいろいろ説明する。見ている人にも「どんな風を感じた？」って必ず聞くんですね。そうやって人を必ずうまくつないでいくような感じの循環的な話をやりながら、その積み重ねが人が人と一緒に何かやっていくというような事につながる。多分それが自分の作品創りにも影響していくし、知らないことを分かるというチャンスにもなると思うし、そんなことをやりながらやっています。

最近は生徒同士でお互いに振付けてみましょう、というのをやっています。それも多分、何故そういう動きをしたいの、とか何故そういう振付をしたいの？とお互いに聞きあいをしながら、進めているという感じで、お互いのことが良くわかる、ということがおもしろいダンス創りにつながっていくんじゃないかと思っています。だいたいそんなところです。

佐東

ありがとうございます。西田さんは、専門が心理学？

西田

そうですね、一応、私の仕事はわかりにくいんですが、ユースワーカーっていうんですね。最近(東山は)中学生から使えるんですが、中学生から30歳までの若い人が使っている施設で、もともと

専門はカウンセリングなので、カウンセリングをずっとやっていたんですが、ある時期からなぜかお芝居とダンスを中心にやっている。今もカウンセリングはやっているんですけど、そんな感じで、自立的な活動を支援する役割といいますか、困った時に助ける役というそんな感じの職員です。

佐東

ぜひお時間ありましたらこの分厚いレポートもお読みください。JCDN のサイトにも西田さんの論文が載っています。あと、東山青少年活動センターは、今京都の中でダンスアーティストたちが中心になってダンスのフェスティバルとか、活発に活動されているところですので、もし京都にいらした際には、ぜひ寄ってみてください。どうもありがとうございました。砂連尾さんと西田さんでした。

4 番目に発表いただく、伊藤キムさんです。よろしくお願いします。

「伊丹・仙台などにおけるワークショップ」

伊藤キム (振付家・ダンサー/伊藤キム+輝<未来>)

伊藤キム (振付家・ダンサー/伊藤キム+輝<未来>)

こんにちは、よろしくお願いします。ではまず、こちらの映像をご覧ください。

(映像)

これは、去年の3月に伊丹アイホールでやったワークショップパフォーマンスで、オーディションで10名のダンサーを選びまして、約半年間ワークショップをやって、1時間の作品に仕立てました。プロのダンサーもいましたし、アマチュアのダンサーとか、手前の彼は大学で映像を勉強してたりとか、奥の彼女は花嵐という京都のパフォーマンスグループのメンバーです。

ちょっとこれ(映像)だと分かりにくいんですけど、アイホールの会場を四面お客さんが囲むような形にして、その真ん中を使ってああいう風に踊っているんですね。だいたい皆さん年齢的には大学生から30代中盤ぐらいまでの人達でした。

こういう感じのいわゆるレジデンス形式のワークショップというものだったんですが、実際のワークショップの期間は、半年近く。本番前の3週間は伊丹の方にいきまして、3週間滞在して、アイホールの稽古場とホールを使ってリハーサルを集中的にやって作品にしたんですね。というものと、もう一つ別のものを紹介します。これは、今年の3月に仙台でやったワークショップです。

これはレジデンスではなく、僕の伊藤キム+輝<未来>のカンパニー公演が、仙台で2月にありまして、そのカンパニー公演とセットになった、単発の一日だけ3時間のワークショップです。ちょっとこれはいわゆる普通のワークショップと違ってまして、(映像を)見ていただければ分かると思います。

(映像)

これは身体の力を抜くってことをやっています。ああいう風に2人1組になってパートナーの身体を転がしていく。とにかく力を抜いて身体を硬直させないで、ダラーンとさせてパートナーに身を任せちゃうというエクササイズですね。

これは、さっきと違ってちょっとやり方が乱暴になってきて、というのは、丁寧に転がしていると、身体の力が抜けて、ガタンと身体が落ちこちていくことが分からないんですね。なので、あんまり丁寧に転がさないで、ポンと投げするような感じでやってください。

次は、1人でやるんですけども、1人なんだけど、カタンとかバタンとかしないで、ああいう風に一定のスピードをキープして転がっているという感じです。

ワークショップで僕は、これを身体の体重をなくして、体重があるからカタンとなるんだというふうに言って、体重をなくしてやりましょうと、そういうアイデアでやってるんですね。

それを、ちょっと場所変えて、階段でやってみましょうと。

これは、仙台市の仙台市青年文化センターというところの企画でやったワークショップなんですが、ホールの中にこういった大きな階段がたまたまありまして、それを僕がたまたま見つけて、ぜひあそこでやってみたいということをホールの方に言ってやらせてもらったんです。1人だけなんか動いているのはスパイダーマンと言ってたんですけど、この時は、割と演劇をやっている方が多かったみたいですね。

今のはちょっと特殊なもので、稽古場の方でああいう身体の力を抜くというエクササイズをやって、それを全然普通ダンスで踊らないような所を使って実践してみる、というやりかたなんですけども、日常の身体をそうじゃない全然違う非日常の状態に無理やり持ってっちゃいましょう、というそういう試みなんです。僕の中でもそれはほとんど遊びなんですけど、要するに、ダンスっていうのは、普段生活をしていて稽古場に行って練習をして、っていうところから始まっているんだけど、いわゆる舞台だとかそういうところに乗けるためには、なんらかの身体を昇華させる作業が必要になるんですね。そのためのワークショップであったり、リハーサルであったりするんですが、それをこうああいう風に、みなさん割と簡単にやってしまわれていて。あの階段をころころ転がったりするのって、最近僕の中でとってもマイブームでして、いろんなワークショップでやっています。アメリカでもやりました。こういうのを「階段主義」という風にして、公演をやりたいなと思っています。

ちょっと話がそれますが、階段主義をやるには、幅5メートル以上20段以上の段が必要なんです。

話戻しますが、なんでワークショップをやるかというのは、もちろん依頼を受けてというのもあるんですが、僕の中で作品をつくっていく上での、ワークショップっていうのはただ人に教えるだけじゃなくて、創作の一環なんです。つまり、プロのダンサーだけじゃなくて、さっきビデオにもありましたけど、素人ってとってもおもしろいんですね。ころころ転がってっちゃって、いきなり立ったかと思うとばーって走ってったりして、突拍子もないことを突然やったりする。既成概念みたいなのが全然なくて、自分で勝手に解釈して突っ走って行っちゃう、そういう人なんです。いわゆる素人さんって。

プロの人にはなかなかそういうのが期待できなくて、いわゆる踊りのテクニックとかメソッドとかが身体に染み込んでしまっているんで、それでしか動けない。そうじゃなくて、やっぱりそういうダンスの回路みたいなものが全然なくて、自分の勝手な回路でやっていったり、あるいは回路も何もない状態っていう人たちから僕はとても刺激を受けることができ、ただ教えるだけじゃなくて、僕自身が刺激をもらう場なんです。ワークショップっていうのは。

もう一つ、さっきの階段を使ったりとかいろんな実験ができるんです。つまり普通に劇場で作品をつくるという公演のためのワークショップでなくて、あるどこかの地域に頼まれてやったりとか、全然違う空間を使っているんな実験ができます。

このJCDN そのものも、おそらくそういう考え方にあると思うんですが、ダンスっていうのは、開かれているものである、閉じたとこにあったものを、外にもっと開いていきましょう、というそういう発想がありますよね、根底には。僕もそれはとっても大事だと思うし、僕の中では、今話したような劇場の中だけでなく、違うところでダンスを踊ることができる。いわゆる空間的に開かれているということと、もう一つは人材的に開かれているというのがさっき言った素人とか、いわゆるダンサーじゃない人との作業。刺激をしようという作業を通じて、僕自身もアーティスト自身も、何かもらえるものがあるんですね。参加する人達にとってもそれは刺激になるはずだと思うし、そういう意味でも、人材的にも開かれているというふうになっていって欲しいですし、僕自身はそういうことをやるのがとても好きなんです。ちゃんといわゆるプロの人たちときちんと作品をつくるだけじゃなくて、半分遊びですね。そういう感

じで実験しながらものをつくっていくという作業をいっぱいしたい。ワークショップっていうのは、それにはうってつけの場所だなと思うんですけども。

あと、今後やってみたいワークショップっていうのをもし、あげるとしたら、小学生向けのもの、さっき近藤さんとかの話しにありましたけど、小学生向けのワークショップって最近よくあるんですね。僕も時々やるんですが、小学生じゃなくて、中学生とか高校生、中高生向けのワークショップってあまりないと思うんですね、まだ。それはぜひやってみたいですね。あと、中高年。中高年の男性、おやじ。そういう人たちを対象にやってみたいと。年齢でいうと 40 代後半から無制限。できれば全国いろんなところのおやじで実験してみたいなど。いずれは、“伊藤キム+輝くおやじ”っていうカンパニーをつくって、ここですね、輝くのは、当然、これホントマジですよこれは、ホントに。

おもしろいんですね、おやじって、さっき素人がいかにおもしろいかっていう話しましたが、歳を取ってるっていうのは、若者にはない味があって、当然皆さんおわかりだと思うんですけども、若いやつは青いですね、やっぱ。青いから引き出しもあんまりなくて、ただ突っ走るだけで、それはそれでとても良いところではあるんですが、歳とっている人って突っ走れない分、別のところで勝負しないといけないって、こうにじみ出てくるのがとってもいいんですね。特におやじが。おばさんもいいですよもちろん、おばさんはおばさんで良いと思うんですが、今私おやじがブームなので、是非うちの方でおやじワークショップをやってくれ、しかも階段でというのがあれば、ぜひ教えてください。

階段に関しては、さっき話したようにああいう感じの階段。屋外、屋内に限らずできます。これこれこういう階段があるけどどうか、という情報があれば、是非教えてください。僕今、日本全国階段をみて回っているぐらいですから。階段フェチなんです。どこでも行きますので、やらせてください。

ちょっと話がそれましたけど、とにかくそんな感じで、ワークショップっていうのは、いろいろ実験とか遊びができる場であって、普通の公演と同じように僕自身はウェイトをおいている活動です。

以上です。ありがとうございました。

佐東

ありがとうございます。一つだけ先に質問なんですけど、小学生でなくて中高年生っていうのもそれもなんか理由があるんですか？

伊藤キム

小学生はわりと乗せれば結構おもしろがって半分遊びで動いてくれるんですね、僕自身も一緒に遊びながら踊ったりとか出来るんですけども、中高生って微妙な年齢の子どもたちをちょっとづつ開いてあげたいなという意図があったりですね。多分ある意味で固まりつつある時期だと思うんですね、そういう年齢の子をちくちくちくちく刺激したい。

佐東

後ほどのフリーディスカッションで。

伊藤キムプロデューサーの高樹さんです。

高樹光一郎 (JCDN ボードメンバー/伊藤キム+輝く未来 プロデューサー)

JCDN の方もやってるんですが、伊藤キムさんの制作もやっています。

一つだけ。今の階段の話なんですけど、ほんとに全国津々浦々階段をみてキムさんが回っているんですが、実際にはいろんな規制があったりとか、階段を転がると言っただけでだめというところもある

んですけども、そういう中で、一回目として、大阪のダンスボックスの近くのスパワールドというところに階段があるんですが、ちゃんと公演仕立てで、ダンスボックスさんでワークショップをやって、関西の人と東京からもパフォーマーを連れて行って、7月27日にやります。それははじめて稽古をやっての階段主義という公演仕立てでやりますので、お時間のある方は是非よろしくお願いします。

佐東

各地に近所にこういう階段があるという方は連絡をキムさんの方に送ってやってください。
伊藤キムさんでした。ありがとうございました。

「岩下徹ワークショップ」

志賀玲子(JCDN ボードメンバー / 岩下徹 制作)

佐東

色々活動されています中で岩下さんのワークショップについてお話していただきたく内容を変更させていただきました。志賀玲子さんです。よろしくお願いします。

志賀玲子 (JCDN ボードメンバー / 岩下徹 制作)

よろしくお願いします。ボードメンバーのプロフの紙にもありますが、基本的にフリーの制作者ですのでいくつかの公立ホールのプロデュースもしているのですが、同時に岩下徹のソロ活動の制作もしております。今日のプログラムのほうにはアイホールのプロデューサーとして岩下徹のワークショップというような出方をしていますが、全くそうではなく、岩下徹個人の制作として、岩下徹の行っているワークショップの活動を報告したいと思います。

お手元にお配りしております、2枚つづりの“岩下徹ダンスワークショップ少しずつ自由になるために”という紙がありますが、2枚目の紙に“私の考えるダンス 交感としての即興へ”という岩下の文章があります。これはワークショップに対してのことではなく、彼がどういうことで踊りをやっているのか、ということについて書いた文章です。彼にとっては自分がパフォーマンスをして踊るということと、自分ではなく他者に対してワークショップをやるということはあまりかけ離れたものではなくて、自分の身体を使って踊ることがパフォーマンスとするならば、人の身体を使って作品をつくるのではなくて、他者との関わりの中で一つの空間・時間をつくっていくことをワークショップと捉えているようです。ですから全てのパフォーマンス、ワークショップ、ダンスセラピーは、全てここに書かれている“私の考えるダンス”この考え方の中で行われているものです。具体的にワークショップに関してどのような考え方でどのようなことをやっているのか、というのが書かれているのが1枚目の“自己と向き合う”、“他者と関わる”という2つの文章です。

劇場のプログラムとは違い、アーティストの活動の中で行われる(それぞれの)活動は必ずしも論理的に組み立てて活動を組んでいるものでないので、うまく整理がつかない部分もあるのですが、「発表を伴わない単独のワークショップ」、「ワークショップをやったあとに発表公演をやるという形のもの」、「精神科におけるダンスセラピーの試みもしくはハンディキャップを持った人達へのワークショップ」、という3つにわけてお話ししたいと思います。

今も申しましたように、基本的にはダンスの活動の中にあるものとしてワークショップを捉えています。まず公演の伴わないダンスワークショップについてお話しします。

岩下徹は山海塾のダンサーでもあります。今回ご紹介するのはあくまでソロ活動としての活動です。即興ということにこだわって活動をしており、全く作品をつくりません。何本か過去にはありますが、作品をつくるつもりはありません。言葉の上でも、作品と即興とを対極のものとして位置付けた言葉の使い方をしているようです。

「即興」ということを例えば、動きを見つけるための方法としての即興ではなく、ちょっとカッコ良すぎる言い方がたかな、という気がします。彼に言わせると“生き方としての即興”。音楽でも即興にこだわってされている方がいるように、ダンスであろうがなかろうが、即興というものがその場にいる人をどのように結びつけることができるかということで、この点に共感を持つ方たちと出会っていきいたいという考え方で、パフォーマンスもワークショップもやっています。ワークショップ = 即興とは何かということを追求しております。

形としては、1回3時間の単発、一日限りのものなど御要望に応じていろいろなケースがあります。ご要望に応じて行っただけでなく、自分たちの方で自主的に毎年定期的に行ってもいます。単発のものか、もしくは1週間で5・6コマ、2泊3日、3泊4日の合宿のような形で5・6コマなどがあり、全く初めての方と経験のある方を分けた形で行っています。また京都舞台芸術大学舞台芸術学科でもクラスを持ってあります。今、経験者という言い方をしましたが、ダンス経験があるという意味ではなく、岩下徹のダンスワークショップを経験しているかどうかで分けています。対象者にダンス経験があるか、ないかは問っていません。どちらかといえば、ダンスの経験がない方に対してのワークショップが多いです。

基本的には、音楽は全く使わず、鏡を見て形を確認するというのも全くありません。先程のキムさんのビデオと非常に似たようなことをするんですが、運動量もそれほど多くなく、日常生活をしている体というのが、自分では意識していないがこわばりのあるものだということをもまず認識し、開放することによりかなり多くの時間を費やします。なので、半分以上の時間は、床に寝転がった姿勢からの様々な動きを繰り返します。日常生活の中で誰もがやっている動きをスピードと質感を変えることで、日常とは違う自分の体に気づくという仕掛けになったプログラムもっています。例えば床に寝転がって、非常にゆっくりと寝返りを打ったり、連続で行ってみたいと、非常に単純な動作を丁寧に行う、今申し上げたような事がレジュメ内の「自己と向き合う」の内容です。最初は他者との関わりというものよりも、むしろ自分ひとりで自分の身体を感覚していくということを行います。次の段階として、今言ったような自分の身体感覚を知った上で、同じ場に存在する他者と関わり合い、関係性をつくっていきます。それにはデュオから、3人であったり、1人と大勢、など様々なバリエーションがあります。基本的には、なにか振りをつけて「このように動きなさい」というような形の指示はほとんどなく、スピードや質感の指示が与えられて進められていきます。

(映像)

これは瀬戸市というところでやった親子対象のワークショップなので、異例として音楽を使っていますが、岩下は、ばらばらにやっている参加者に動きながらも言葉をかけていく、2時間であれば2時間ずっとしゃべりっぱなしです。自由な動きの中に、ある合図を出すことで質感を変えたり、ストップと動くということを繰り返したりします。余り映像としても良くないものなので、雰囲気だけでも伝わればよいのですが、こういった単発のものをやっております。

岩下は'83年からソロ活動をしていますが、初期の'86、7年ぐらいからワークショップをやっていたようです。私はその当時のことはほとんど知りませんので今お話ししたようなことは、ここ10年間ぐらいをかけ、プログラムとして徐々に徐々に築きあげてきたものです。

基本的には、彼はワークショップ後のまとめの公演は必要ないと考えていて、ごく最近までまとめの公演をやるということはほとんどありませんでした。というのも今お話しをしたような内容のワークショップですので、形をつくるのが、美しい動きやかっこいい動きを追求することよりも、むしろ自

分の内面的な“気づき”というものがどういう形で現れるかという、常に過程でしかないものが多いためです。もしまとめの公演を目的にした場合には、それらはどこかで形として切ってまとめてしまわなければならない、そのために失うものが非常に大きいと彼は考えるので、発表やまとめの公演というのを拒んでいたのです。

しかしアイホールのプロデューサーという私のもうひとつの立場で、数年間一週間単位のワークショップを続けていくうちに、参加者の中からももう少し先に進みたいという要望が出てきたのをきっかけに、(岩下のワークショップでも)'97年に初めてワークショップの発表公演というものをやりました。

(映像)

これは先程ご説明なさったキムさんのワークショップと同じ枠で、約30回100時間ぐらいのリハーサルを通しまして、10名で作品をつくるというものです。非常に矛盾した企画で、参加者の舞台・ダンス経験は問わないが、「あくまでワークショップのまとめとして内輪で見るということではなく、公演として作品をつくることを経験するワークショップです」という形で募集をかけました。

いままでの岩下のワークショップでは結果を問わない、何処までできているか、とか、どのような形になっているか、ということは一切問われませんでした。ですけれども、この発表公演では…公演といいましてもこれは作品ではなく、全て即興です。あるシチュエーションだけが設けられていて、中の動きは一切振りをつけていませんので、各参加者の中からしかできていません。

(映像)

経験を問わないで募集をかけて、人前に立って作品が成立するところまで持っていくというときに、100時間程度というのは本当にぎりぎりの時間でした。まず参加者に伝えたのは、普段のワークショップでやっている事と全く同じ事しかやらないけれども、これが舞台になるためにはジャンプがいるという、そこをどうつづっていくのかという事が一番難しいところでした。

振りをつけないので、基本的にはいつものワークショップで行っている寝返りを打つとか、立ったり座ったり、ということとか、例えば1分の時間の中に二人の人間が出てきてデュオを踊るなど延々とその繰り返しで、最終的に構成ができたのは、1週間前という状態でした。この時の参加者の中には定年退職された60過ぎた方もおり、下は18歳から上は65歳と年齢の開きが大きいものでした。

岩下にとっては発表公演を伴ったワークショップというのは非常に特殊な例で、ある程度、時間的なことや人数の問題が整わないと実現できないという判断をしております。しかし、最近ワークショップをやってくれないかというお話の中で、できたらまとめ・公演もという声も非常に多いのですが、その要望に対して、岩下の考えをどのようにして理解していただくか、という点が難しいと思っております。

主催者の方の中には、岩下の今申したような活動を知っていて言ってくれる方もあるんですけれども、必ずしもそうではなく、コンテンポラリーダンスが盛り上がっているという事実の中だけでお話をいただいた場合などでは「最後にレビューのような発表ができませんか」などと要望されることも多く、そのようなギャップを埋めるために、何ができ何ができないかを丁寧に伝えていくことに時間がかかっていくことが多いと思います。

それでは3つ目のダンスセラピーの話に行きたいと思います。

'88年から滋賀県の湖南病院という精神科の入院患者を対象にしたダンスセラピーの試みというのをやっております。医療行為の中の一部を担うということで、岩下が1人でやっているということではなく、そこには必ず看護婦さんや医師らが立ち会うという形での共同作業として行っております。

この活動は、特に岩下がダンスセラピーについて勉強をしていたからというわけではなく、偶然の出会いから始まったものです。湖南病院というのは、もともと非常に革新的な精神病院であり、閉鎖された病院ではなく、「芸術などとの関係からより人間らしい状態を」という考えの下に、いろいろな芸術家が入り込んでいました。岩下は、そこで芸術療法を行っていた友達の美術の作家にたまたまついて

行ったのですが、一人の患者さんが山海塾を知っており、急にそこで踊れっということになったそうなのです。彼が円陣の中で踊り始めると、患者さん達の中には現代詩のような事を喋り始めたり、手を差し伸べたりする方がいっしょり、その時、岩下にとって非常に大きな転機になるような経験があったようです。彼自身の言葉によると、それまでの自分のダンスというのは、自分がここにいるということだけを叫んでいるばかりであったが、病院での体験を通して、自分が叫ぶということだけではなく、むしろ他者の声に耳を傾けるということがその瞬間自分の中にやってきた、ということです。この転機と、病院側からの意向もあり、この活動を始めるに至ったのです。

病院の中で行っているワークショップは一般のワークショップと基本的には同じ内容のことをやっていますが、相手に重度の患者さんが多いということで、歩みは遅々としております。外国の方から取材を受けた時に、「ダンスセラピーにはどういう効果があるのか」と尋ねられたときに、岩下もバカ正直なものですから、「ちょっと挨拶ができるようになったり、会釈ができるようになったりした人もいます」と答えたら、なんだそんな程度かと鼻でフフンと笑われた経験もあるんですけど、その些細な変化ですら、いかに目を見張るようなものであるかということは、病院の状況を知らなければ中々理解できないものかもしれません。例えば、判りやすい例でいいますと「床に横になってください」といった時、健常な方ですと床に横になるというのは比較的楽な行為ですから、割とリラックスがしやすいわけですが、硬直して首が上がった状態のままになり、べたっと床に横になれないという患者さんが非常に多かったです。

また、長く入院されており、昼間はベッドの上ですっとうつむいたまま過ごしていらっしゃる方が、ダンスセラピーの時だけはベッドから出ていらして、年に二回の納涼祭とクリスマス会の時に岩下とほんとに短い一分、三分というようなダンスと一緒に踊るということを、非常に励みにしておられる方もおります。そのことは岩下にとっては最初に病院に行ったときにおきた経験と同じように、そこに自分の求めるダンスがあるという感覚があり、何か自分が教えているという感覚よりも、そういうダンスに出会うというチャンスが非常に多いと感じていると、彼自身言っております。

他にもハンディキャップを持った人たちを対象にした有志のサークルがあり、そういうところで定期的に1ヶ月に1回ワークショップを行っています。岩下のことを御存知の方はおわかりになるかと思いますが、コミュニケーションということを行いながらも、本人はコミュニケーションがとても不得意な人間であります。ですが、唯一ダンスをしている時だけは、かろうじて、たまに成立することがあるということが原動力になっているところがあるようで、生きづらい思いをしている人の佇まい、つまり、動けるダンスとか華やかなダンスよりも、動けない身体、動かない身体というもののほうが、自分のダンスを考える時にフィードバックが大きいと考えているようです。その点で精神的な病気を持っている方とか、ハンディキャップを持たれた方との場というのは、大きな刺激を与えてくれる、というのがずっと続けている理由なんだと思います。

(映像)

最後に見ていただく映像はフランスのラ・ポルド・クリニックという、ここもまた革新的な精神科のクリニックなのですが、その患者さんとのセッションです。

岩下が即興で踊っているということは、ワークショップと公演の垣根が非常に低いということです。これは患者さんたちの集うサロンがありまして、そこに集まった患者さん達に彼は、「今からここで皆さんとセッションをします、楽器を弾ける人は楽器を弾いてもいいし、歌を歌っていただいてもいいし、一緒に踊っていただいても結構です、この場を一緒に創りましょう」と声を掛けて始めたところ、二人の患者さんたちが踊り始められました。こちらの女性の方は、前回のワークショップにも参加していらっしたりダンスがお好きなようなのですが、この男性の方は全くダンスをやった経験がありません。このジャン・ルック氏は、この時にかとても触発されたみたいで、おもむろに立ち上がって、このような即興の関わりが生まれてきて、非常に私もビックリしたんです。このピアノを弾いている人も患者さんと、

1時間中ずーっと即興で弾きっぱなしでした。

この病院はスタッフが全く白衣を着ていないので、誰が患者さんで誰がスタッフの方が全く別れておらず、非常に開かれた共同生活、コミュニティのような運営をしているところです。いろいろな芸術活動もやっております。フランスの古城めぐりで有名なロワール川のあたりにある病院です。

全部言えたかどうかわかりませんが、最後に観ていただいたようなものを、アイホールのイベントとしては子供向けの「プレイ！！」という企画で行っております。これは、岩下自身は踊っているだけでワークショップをやるわけではないのですが、その場にいる人は何をやっても良い条件で、子供たちや普段は劇場にいらっしゃらない周辺住民の方々を対象に、音楽家と岩下がセッションするのですが、その時も子ども達の積極的な関わりがあります。岩下は子供向けのワークショップはどれも不得意なようで、最近すごくご要望があるのですが、実は余りうまくない。おそらく、子ども達を楽しく乗せていくのが非常に不得意なのではないかと思うんですが、ただ、ワークショップとしては子どもとの関係というのは非常にとりにくいのだが、踊りを踊っている時間というのは全然違うようで、子供は本当に一時間中一緒になって走り回って、関わりが生まれて、非常に面白い場です。もしご興味があれば、今年10月13日に兵庫県伊丹市のアイホールの方であります。

先程のキムさんの、今後どういう人たちとやりたいか、という話しにつながってくると思うのですが、子供向けのワークショップのご要望があったときに、大概の小学生というのはワークショップをやらなくても元気で走り回っているんですね。しかし、中には何人かは壁際に座り込んだまま全く動かないでじーっとしている子もいます。同じ子供でも、子供だからみんな同じということではなく、むしろ、そのような子どもたちを対象にしたワークショップならばやってみたい、とっておりました。

佐東

岩下さんは今海外なので今回は志賀さんにお話ししていただきました。

志賀

アイホールに関する事は、後ろにアクティビティーズレポートというのを置いているので御興味のある方はまたこちらをご覧ください、御質問下さい。

佐東

志賀玲子さんでした。どうもありがとうございました。

フリーディスカッション

2003 年 6 月 6 日 金曜日 16:00 - 16:30

【司会】: 佐東範一(JCDN 代表)/水野立子(JCDN 事務局長)

佐東範一 (JCDN 代表)

ではそろそろ始めさせていただきます。本日最後のプログラムになります。フリーディスカッションという形式で進めさせていただきたいと思います。

皆さまもずっとお話を聞いていて、いろいろ質問したい事やご自分の体験談など、話したい事があつたと思います。何でも結構ですので、どんどんお話していただきたいと思います。

司会は僕と水野で進行させていただきます。

先程の話を聞いていて思ったのですが、私が昔舞踏をやっていた頃、舞踏をやっている人間というのは社会からはみ出した存在だったのですが、今は世の中が変わってきていて、以前と違いダンスが社会の中で必要とされている。ダンスをやっている人たちでないと出来ないことがあり、ダンスによって様々な可能性が広がってきていることを、JCDN の活動の中でいろんな形で実感しています。

水野立子 (JCDN 事務局長)

参加していただいた方には主催者側の方やアーティスト側の方、様々な立場の方がいらっしゃいましたが、2 時から 5 時の 5 つのケースを聞いて、今考えているプランなど何でも結構ですのでそこから話を始めて行きたいと思います。ご発言のある方は手を挙げてください。

ワークショップは、アーティストの数があればそれだけの数のケースがあるわけですが、今日の 5 名のアーティストでも全く違う例を拝見しました。ですので、これが正解だ、という答はないと思うので、どういう目的でどういうワークショップを開いていきたいか、どういう可能性を今回のワークショップで伸ばしていきたいか、という主催者の思いがあり、では、それをやるのが得意なアーティスト・興味をもつアーティストは誰だろうという、アーティストと制作者との出会いが必要になってくると思います。どういうアーティストがどういうことをやっているかわからない、という現実もあると思う。JCDN もダンスファイルで特色を書いたりしてはいますが、主催者側からすれば実感としてまだまだ情報が足りないということもあるし、アーティストとしてもどういうところが、どのようなワークショップをやりたいと思っているのかを知らないということがあると思います。その辺を結んでいく情報交換の場にこの場がなれば良いなと思います。是非ご発言ください。

あまり発言が無い様なので、こちらから指させていただきます。遠いところから来ていただいた、長崎のアルカス佐世保ホールの伊藤さん、アルカス佐世保ではダンスプログラムは行われているのでしょうか？また今回ワークショップの話をお聞きになって今どのようなことをお考えですか？

伊藤晋 (アルカス佐世保)

佐世保地域文化事業財団という財団名、ホール名が通称アルカス佐世保といいます。3 年前の 3 月にオープンしまして、大ホール 2000 席、中ホール 500 席、イベントホール 350 席の 3 ホール、2 つのリハーサル室と練習室を保持した多目的型ホールとなっています。

過去にアルカス佐世保でダンスを実際にやったことがあるかという、実はオープンして 3 年経っていますが皆無に近い状況です。唯一ジャンルとしてダンスという事になるとは思いますが、夏木マリさん

の印象派を今年の 2 月に実施しました。お客さんには初めて属にいうダンスダンスしていないダンスを間近で見られる機会であり、非常に喜んでもらえました。

開設準備のころからダンスをひとつのテーマとして掲げてはいましたが、先程佐東さんがおっしゃった通りどこからどうアプローチしていいかが全くわからない状況で、それで今回このフォーラムに参加させていただいた次第です。

5 つのワークショップ・それとワークショップに伴う公演のお話をさせていただき、非常に参考になりました。一度持ちかえってどういった方法が考えられるのか検討したいと思います。例えば、JCDN の方で、こういうファイルを作成して、名鑑的な位置付けということでたくさんのアーティストやカンパニーなどを掲載されていますが、直接カンパニーなりパフォーマーに連絡をした方が良いのか、それとも JCDN を通じて話を持っていったほうが、よりアドバイザー的なことをしてもらえるのか事前に聞いておきたいと思いました。

佐東

今のことについてですが、JCDN ではコーディネート事業としてワークショップのコーディネートも行っていきます。先程の福岡のダンスジェネレートについても、どのような形のワークショップがいいのかということ、アドバイスというよりは、一緒に考えながら行っています。仙台でも先程の伊藤キムさんのワークショップや公演などもコーディネートしています。

主催される方と、どのような意図でどういうことをしたいのか、一日限りのワークショップなのか、目標として作品を創りたいのか、それとも初めての人にワークショップを実施したいのか、そのような事を話し合いながら、どういうアーティストのワークショップをしたら良いか進めています。

水野

直接ダンスファイルを見て連絡をしていただいても全く構わないですが、はじめて行くにあたり、どういふうに始めていけばいいか、アーティストの誰が得意であり誰が適しているのか、というような情報としては、JCDN のほうが知っていることはあると思います。

見る機会のある東京や大阪の人は劇場に行ったり WS を見学したり、足を運んで自分で見て選択することができますが、なかなか見る機会の無い地方の方などは情報が得にくいですよ。そういう場合は JCDN を利用してもらっても良いと思います。

伊藤晋

ありがとうございます。先程の階段主義という話がありましたが、非常に感銘を受けました。実は、アルカスには、大ホールに 1 階席から 3 階席までぶち抜きの階段を用意しています。

佐東

すばらしいですね！

伊藤晋

階段の種類も木の階段とコンクリートの階段と多様で、階段部分はガラスでできられて外も階段地下も階段と、非常に恵まれた環境です。ぜひ、階段見学にいらしていただければ幸いです。

伊藤キム (振付家・ダンサー/伊藤キム+輝く未来)

写真の資料は今ございますか？

伊藤晋

今日は持ってきていませんので、メールかなにかで送らせて頂きます。

伊藤キム

後ほどぜひ。

佐東

一つ発展しましたね。

伊藤晋

ありがとうございます。

草野京子 (財団法人城陽市民余暇活動センター)

城陽市文化パークは大規模複合総合文化施設で、開設後7年が経っています。いろいろな自主事業を年間30本程度やっておりますが、演劇ワークショップを地域創造の助成で4年前から行っています。昨年度からはダンスのワークショップを始めました。昨年はヤザキタケシさんのコンテンポラリーのワークショップをしました。

今年もまた地域創造で申請し、ダンス公演で助成をいただき、基本的には同じような方法でワークショップを行っているのですが、(去年と)全く同じでは面白くないので、芝居の二口大学さんを含めて、朗読か劇か何かを含めたコンテンポラリーなダンスの出し物をと考えています。経費も今年は恵まれた状況なのですが、一番困った事に参加者が少ないんです。昨年は20名定員で募集をし、22名応募があり、全員に参加していただき、作品もすばらしい物ができたと思います。

今年も定員25名で、ワークショップ開催回数も4回増やし、尚且つ同じ20000円という参加費でやっているのですが、7月5日締め切りなのに現在7名しか応募がない。自主公演でワークショップを行う場合、主催者側でそれが成功したと言えるかどうかは、参加者数にかかってくるかと私自身思っているんですね。参加者が少なかった場合成功したと認められないのが実情です。ですので、他の会館の方にワークショップの参加募集をどのようにされているか、というのを聞きたいです。新聞などにもプレス資料を渡して、書いてくださいとは言っていますが、なかなか実際に記事にしていだけないんですよね。

水野

それでは、さきらの山本さんが良いでしょうかね。先程のフォーラムの、はじめの方の話ですけど、さきらでも最初は参加者が5人以下だったと伺っていますが...

山本達也 (栗東芸術文化会館さくら プロデューサー)

白井さんのダンスワークショップ企画でいうと、1年前半前はそんな状況であったと思います。

水野

どのように、今回はされたんでしょうか...それは続けられていって、その辺の経過を...

山本

多分全て前回と同じような方法を取っていたと思うし、今回も取っていたはずですが、今回に関して

なぜ 29 人になったのかはよくわかりません。

佐東

なにか特別なことをしたということは？

山本

特別なことはしていません。まあ、応募の理由は、白井さんのことを知っていたり、ダンスと映像と音楽の作品ということに興味があったり、地域と大いに絡んでそれが作品になるということに興味があったりで、一人一人様々な魅力のある個性的な人が奇跡的に集まってくれたので、結果としてそれが成功につながったと思うんですが。

今回それだけの人数が集まったのは、1 年半前からのことがあったからだとは思いますが。子供たち延べ 400 人のワークショップをやって、実際 4 人来ましたし、それぐらいやってこれくらいなのかなというものなので、まあ続けていかなければしょうがないかな、という事ですかね。

志賀玲子 (JCDN ボードメンバー/アイホールプロデューサー/岩下徹 制作)

今回のさきらのチラシ、すごく素敵だったと思うんですけど、過去にああいう感じのチラシ、作ってらっしゃいました？

山本

募集のチラシですか？今まではしていませんね。

志賀

そうですね。最後に公演をするというワークショップでの参加者募集チラシが、白井さんの“リビングルーム”と言う作品の持ち味とか、地域とつながってやるという事が、すごくはっきり伝わるいいチラシだったんですね。それまではこういう打ち出し方って無かったと思うんですよね。あのチラシの訴求力というのはあったのでは？この白黒と緑のチラシがすごく素敵だったし、これに反応したダンスファンの方は多かったのでは？

山本

そうですね、それは最後に有料公演までするというので、チラシを作らなきゃということにもなったので、公演をすることが逆にワークショップ自体を盛り上げたと言えると思えました。(ちらしの写真で線路で逆立ちしている事のインパクトも、教育委員会主催なのに...と苦情もあったが、良かったと思います。

水野

今までは公共ホールという堅めのチラシだったんですよ。だから埋もれていたっていうか、あんまりアートに興味のある対象者の目から外れていたのかもしれないですが、今回これはアーティストの制作側からデザインされたものですよ。ですから、よりアーティストの持ち味などを生かした募集をかけたということも一つの要因という気がしますね。

白井剛 (振付家・ダンサー/発条ト)

はじめ僕は何十人も集まったというのにびっくりしましたが、音楽・映像・地域というすごく間口の広

い募集の打ち出し方をされていて、そのどれかに興味がある人がひっかかってきていて、間口が広い分単純に数が多くなった、という事があると思います。

今まで美術・音楽をやっていたが、ダンスはやったことがないような参加者が多かったんですが、自分の活動に行き詰まりを感じていて、でも身体を動かすのには可能性を感じていて...という人も多かったと思います。参加者の大半がダンス経験者ではなく、はじめは舞台に出ることに迷っている人もいましたが、最終的にはみんな舞台に出た。作品の性格もあると思いますが、ほくもダンスをしていない人の身体をたくさん見られたし、良かったです。

草野

ありがとうございました。チラシについては助成がついたので、前回のワークショップ風景の写真などを使っていて悪いものではないんですね。昨年のもものと比べたら雲泥の差のチラシをつくって募集しました。去年は全くの手刷りででしたし。あと、私一人で企画していて、グループで意見を出し合うということがあんまり無いので、とりあえず演劇の3年間の実績とダンスを少しでも結びつけようと思って両者を絡めたような募集の仕方を考えて募集をかけたんですが、なかなか上手くいかない。ただの地域性のせいにしたくないんですが...

水野

演劇とダンスというふう結びつけると逆に垣根が高くなってしまったりかもしれないですね。というのは富山でJCDNが何年か“踊りに行くぜ！！”をやっていたんですが、なかなかお客様が増えない。ワークショップを1、2日ならまだ人が来るが、いわゆるコンテンポラリーダンスが富山には無く、私達としてもホールの方もすごく難しく、頭を抱えている状態です。今年の試みとして、ダンスという打ち出し方ではなく、カラダを使って遊んでみよう、とか、カラダを知ってみようとか、特殊なものではなく、わかりやすいチラシ・宣伝の方法からやってみようという案が出ています。

最近、大谷さんもダンスが全くない地域でワークショップを始められているのでその辺の意見も聞いてみたいです。

大谷 煥 (JCDN ボードメンバー/NPO 法人 DANCE BOX 代表)

各都市の規模・地域の規模によって広報の仕方も当然変わってくると思います。DANCE BOX(以下dB)でも今年2月から5月にかけて公民館や市・区の施設などを使って、地方自治体からの受託事業としてワークショップを行いました。非常に人が集まったんですね。

これまでdBではワークショップを2つの方向性で考えていて、プロを対象にしたものと一般市民を対象にしたワークショップを行ってきました。一般の人を対象にしたワークショップをそのような地方の区民センターでやる意味というのは、こういった区民センターというのが、どの区にも必ずあるのほとんど稼働していない、特にホールが稼働していない、そういうところを活性化するという意味合いも含め、やってみたわけです。

これが今までに無い集まりを生んだというのは、広報のありようなんですね。dBがワークショップ、公演をするにしろ、これまでの活動からダンス・演劇・美術のネットワークは持っている。アート系のところにはかなり綿密にチラシも撒きますし、ある程度新聞でも広報する。それでもだいたい20人が限界だったのが、それが今回だいたい50人ぐらい各会場に応募があったんです。それが何かというと、CP(カルチャーポケット)というフリーペーパーがあるんですが、これは大阪市の都市協会という財団が出しています。これまで、市の発行するものは、ダサいものだったが、CPは良いセンスだと言われてます。字が小さいとか中高年は相手にしてないとか、いろいろ言われていたりもしますが、こういうも

のが普通に地下鉄に置かれている。各地下鉄に置かれることによって、新聞でもなく、全然舞台やアートに関係の無い人が手に取ってくれる。もう一つは CP 自体もダンスだけでなくダンス・演劇・映画・美術、を扱っていて商業的ではなく先駆的・実験的なものを扱っているというペーパーなんです。それが地下鉄で無料で手に入るということで、このCPがダンスボックスのワークショップに新しい層が来るようになった大きな原因だと思います。城陽市の方では大阪とはもちろん都市の規模も状況も違いますが、作ったチラシをどういうところに置くか、ということはあると思う。区政便りなんかにも情報を出しますが、区政便りというのは新聞と一緒に各家庭に配達されるので圧倒的に見ている人が多いにも関わらず、区政だよりを見て来る人というのはいない。区政便りに書いてあるもののグレードがあるから、本来のダンスWSを求めている人が区政便りを見ていないか見ても気づいていない。ところが CP というのは、デザインの面から言えば、誰をターゲットとしてワークショップに呼びたいのかということに向けたデザインで、それに向かってどこに置くか広報するかが大事だと僕は思います。

もうひとつは、少し話がずれますが大阪の此花区というところの割と不便な会館でワークショップを開催したけど、先ほどさきらの話で滋賀が50%京都が50%という話があったが、大阪市という大都市の中で地域として此花区を考えると、此花からきたのは0人だったんですね。でもそこを通過する人なんか、多少不便でも来てくれる。でも実は地域の人は参加していない。いろいろ作戦を考えないと本当に地域住民が来るということなかなか難しいです。努力しなければならない。

ついでにいうとワークショップというのは、ある意味でアーティストと参加者の対等な関係性が大切。今までは観客の開拓に対してワークショップは非常に大切だと思ってやってきたが、実際に此花でやって50人ワークショップ参加者がいたのに、次の週に開催したワークショップ講師の公演に来てくれた人は、チケット料金が半額にもなるにも関わらず50人中5人しか見に来なかった。これを多いとするか、少ないとするか、という話もあるとは思いますが、此花のワークショップをしてワークショップをすることが顧客を生むのではなく、公演は公演、ワークショップはワークショップ、つまりワークショップに参加すること自体が、ひとつの芸術行為としてあるんだな、と考え方を変えなければならないと思いました。

水野

草野さん、どうでしょう。参考になりましたか？交流会の時にまたいろいろと話をしましょう。

今回さきらの参加者の方が2名いらっしゃっているので、どういう感じが出るきっかけになったのか聞いてみましょうか。京都造形大の山口さん、今後ろでビデオを取っているJCDNインターンの竹原くんが参加していました。どういうところで知ったんですか？ついでに感想もお願いします。

山口春美 (京都造形大学 学生)

チラシを見て参加しました。このチラシがとてもおもしろくて、写真もおもしろいけど、裏に“家を探している”と書いてあって、これは何だろうと...なんかこう、柔らかい感じがし、いろんなことができる期待、ゆるやかな感じがしたので、ぎりぎりだったんですが参加したいと応募しました。

佐東

参加されてどうでしたか？

山口

参加してみて、すごく楽しかったです。毎日の生活があって、週に4回さきらに通い、それだけでなく取材のためにワークショップ以外の日にも栗東町に行ったりということもあり、本当に“リビングルー

ム”漬けの日々の生活だったんですが、踊るというよりも、人と関わって毎日を過ごすという感じでした。

水野

仙台からの千葉里佳さんもキムさんのワークショップに参加されました。仙台もまだコンテンポラリーはそんなに多くないし、まだまだクラシックやモダンダンスが多いんですが、参加したのはどういきっかけなんですか？

千葉里佳 (ダンサー)

私の場合、単純に、伊藤キムが仙台に来るっていうところで飛びつきました。募集人数よりも多くの人が集まったと仙台市の事業団の人に聞いて、仙台がちょっとづつ変わりつつあると感じました。仙台でもコンテンポラリーダンスのワークショップを定期的な受けられるような体制を作ろうということで市民団体が立ち上がって来て、ニブロールやモノクロームさんを呼んで活動していこうという動きが出てきているので、すごく良いと思います。

キムさんのワークショップは考えないでまず動けという話がありましたが、考えることも、感じることも今までと全然違う刺激を受けて良かったです。また来て下さい。

佐東

階段はどうでしたか？

千葉

階段は...、私はどちらかという素人でない部類に入る人間なので、まず怪我したらどうしようと思ってしまい、自分の身体を守る事を考えてしまうので、殻をやぶって突拍子も無いことをやるという素人さんに混じっていくことが大変だったけど、後半は楽しく出来ました。

佐東

仙台も JCDN がコーディネートしていくつかのワークショップも行ってきていますが、先程の城陽市の方のお話を伺って、そんなに簡単にはいかないんだろうなと思うんですね。1回2回やってお客さんが集まると言うより、ある意味では新しい価値観をその地で創っていくような作業なので、じわじわと何回も重ねながら浸透していく気がしています。今までならダンス公演をするという、ダンスの教室だけを回ればお客さんが集まる。その時には一般の人達は対象ではなかったわけで、ずっとそういう形でやってきているから一般の人達にとってダンスっていうのはすごく距離がある。ましてやダンスワークショップで自分の身体を動かすなんていうのは、新しい価値や文化を根ざすような作業になると思う。

志賀さんは、アイホールで関西ではかなり早い段階からワークショップを試みていらっしゃいますが、さっきの話についてはどうですか？

志賀

アイホールは大阪から電車で15分とかかかる、兵庫県伊丹市にあるまったくのベットタウンです。今はちょっと変わってきていますが、アイホールの成り立ち自体が、建てた時の市長の考え方として外から人が来てくれたらいい、伊丹なんてどこにあるかみんな知らないのだからそれを打破したい、集客装置として外の人に来てもらいたいというのがありました。ですので、当初は伊丹市を地域として考えていなかった。小劇場演劇とダンスをプログラムとしてやっていこうという意識が当初からはっきり

りあったので、京阪神間一円を全て関西地域として捉えてきました。

15年経って、そろそろ考えることも変わってきましたが、現実的にはダンスという点では伊丹という地域からの参加は非常に少ないです。ターゲットも伊丹市民ではないことは確か。パルクさんが企画を立てた時にどういうところをターゲットにしているかによって、作るチラシの質感も違うと思うし、配り方も変わってくると思います。情況的によくわかるので、すごく難しいと思う。

私の知り合いのあるダンサーが生活ダンスと銘打って自分のマンションに手書きのコピーのチラシをポスティングしたら、15人くらい集まり、集会場でワークショップをやっているということを知り、すばらしいと思いました。生活ダンスという切り口で彼女が見つけたからそんなに人が集まったんだと思います。が、アイホールとしては今はそういう方向にすすんでいない。その辺りをどう言う風に作戦を立てられるかという感じがします。

近藤良平 (振付家・ダンサー/コンドルズ)

1個思い出したんですが、あっ、嫌な話なんですけど、名古屋でワークショップをやったときに、名古屋のNHKが取材に来て5時のニュースとかでなされるんですけど、非常に困った事に「ワークショップって何ですか？」って聞かれて、ワークショップという言葉はちょっと困るんですけどといわれて、ダンスの講習会とかでもいいですか？とディレクターに言われて、初めてワークショップってということばに疑いを持った、当然のようにやってきたことが当然でなかったのかな、と。

一般的にはかなりマイナーな言葉で、といっても、もうわかってよ、と思うんですが、NHKの生中継だったんですけど、「踊れるようになりませんか？」とか質問なんかしちゃって、こっちは全く目的も違し、1時間前に集まっただけでダンスも上手くなるわけでないのに、そういうのを求められたんで、テレビ媒体に対して、非常にがっかりしましたね。5時というみんながテレビ見ているような時間に、そのTVを見て誤解されてしまいかねないと。

さっきみたいなマンションの話なんかは非常に良くて、自分が個人でワークショップという言葉を考えて、ワークショップ自体どこまで認知してもらい、自分もどこまでわかっているかとはいえないが、ワークショップという言葉自身の根付き・広がりが見え方がわかれば良いですね。

佐東

今の話に繋がりますが、今回のボードメンバーでこのテーマを話した時に、話題になったのがワークショップとクラスの違い、スタジオでのクラスと同じようなワークショップもあるんじゃないか、という話がありました。ワークショップという言葉が浸透していく中で、持っている意味が多様であるが故に、一般に広がりにくいというのがあるのかと思う。クラスとワークショップとの違いが何なのかといわれたら、例えばクラスだったら、テクニックを重視している。ワークショップはじゃあ違うのかといわれると、そうじゃない事もないが違う...では、ダンスのワークショップは何なのかと明確に一言・二言で説明できたらいと思うけど、そんなこと説明する必要ないかなとも思うし...

水野

私はクラスというのは、目的がはっきりしていて、ここまで上手くなりなさいというような教える、教えられるという関係性がはっきりしている、目標が一つしかない習うって言う事で、ワークショップというのは、受ける人がどうなるかもわからない、目指す結果もわからない、見えないものをめざす。それが創造性につながるということもあると思うんです。今日の事例報告で出たのは、全てこういうものだったと思います。参加した人が自身で発見・発明していくことがなければ、単なるクラスになってしまうのでは？

佐藤道代(振付家・ダンサー)

私にとってダンスワークショップというのは、空間と時間を使ってその場に何かを立ち上げる行為だと思う。クラスは技術を習得していただく場と捉えています。

ワークショップという言葉自体がそれほど認知されていないという話がありましたが、2,3年前にワークショップという本が岩波新書から出版されました。去年の全国教育系ダンスフォーラムという国立赤城青年の家で開催されたワークショップの講師をしたことがあります。170人位集まったんですが、ワークショップとはいったい何か、参加型の場づくりとはなんなのか？に興味がある人たち、音楽や環境型・子どもの教育・バイオエネジェティックなどが、8人の講師を集めワークショップとはなんなのか、体験して実際に話合うというような場をやりました。その時に感じたのが、参加型とか、場づくりとかの言葉に魅力を感じる人がすごく多いんですね。2002年の教育改革もありましたし、このままじゃだめだと思っている人は、ワークショップなら何か出来るかもしれないという期待感を持っている人も多い。そこに来た人達も何かしたいと思っている人がすごく多かったです。

わたしはダンスというと特殊に取られがちのため、クリエイティブムーブメントという言葉を使いました。教育委員会の人などもいるのだけれども、ダンスってマイナーなんだなと思った局面がありました。3コマさせていただいて、土地の神話、水に関すること、言葉遊び、をやったんですが他は15人くらいだったのに、言葉遊びというコマに45人くらい参加者が集まりました。やはりこの文化自体が、いかに言葉に寄るところが大きいのかということに改めて認識しました。

先ほどおっしゃっていたとにかく動くとか、ワークショップをする側のダンスの切り口として、いったいどういう内容だったら受け手が体験したいと思うのが大切。その内容・プロセスの部分も言葉として表わせた方がいいと思いました。最後に(アンケートなどで)ワークショップの結果を分析した時に、楽しかった・良かったとか、特に男性で地位のある人はなかなか踊りに参加しにくいということがわかりました。ワークショップという言葉自体がこれから何かしようという人を刺激するような言葉ではあると思いました。

余談ですが、普段は会社でアルバイトをしています。上司が公演を見に来てくれて、すごく喜んでくれた。来週会社の掃除の後で、「じゃあ佐藤さんのワークショップをやってみよう」とか言ってもらえ、実現しました。動きは必ず言葉より強いものがあると思うので、そこをダンサーだからとかいう垣根を作るのではなく、普通の人と一緒に、動いて楽しいんですよ、というのをどうやって伝えていこうかと考えています。

佐東

さっきの話に戻りますが、クラスというと、方向性が決まっていると思うんですが、ワークショップというのは参加者にとっての欲望であったり、主催者にとってはどう社会につながっていくのかであったり、一番大きいのは、アーティストにとって、ただ単に参加者だけに向けたものなのか、キムさんが言ったように、アーティストとしてどう関わりそこでアーティストとして何を得ていくのか、参加者に対するサービスという発想ではなく、アーティストと、アーティストができること、参加者が出来ることの接点を探ることがあると思います。

アーティストの方も、今日皆さん参加されていますが、ワークショップに対する意識の持ち方はどうなんでしょう？

竹井豊(振付家・ダンサー)

フランスではワークショップという言葉は普通使わないです。テクニッククラスとアトリエと言う形で、創造型のクラスがアトリエという名前で存在するんですが、クラスと言ったときにも、日本でいうワーク

ショップの形にも成り得る。言葉の違いであり、それはまた別の問題ですが、多分みんなが求めているのは各自の自己想像型の、どれだけみんなが主体をもって創造していけるかという事だと思います。フランスでは最後に発表する・パフォーマンスをするという形は少ないです。ひとつはフランスのダンスのシステムの違いでもあると思います。というのも、各振付家のスケジュールが詰まりすぎていて、そこまで長いワークショップができない。また作品を最後に発表するというリスクもある。イタリアに関しては、コンテンポラリーダンスは日本と同じような状況なので、まだ模索している最中です、やはり長期のワークショップを行い最後は発表まで持っていきます。

水野

参加されている方の対象は？

竹井

だいたい経験者が多いと思います。ほとんどがセミプロからプロですね。ヒエラルキーの底辺層の拡大ということで、フランス政府の 14 の国立振付家センターのイニシアティブでダンス普及活動が行われていまして、だいぶ市民の中に浸透してきていますが、ダンスという垣根を越えるというところまではいっていない、というのが僕の見るところです。

佐東

先程来られた、ディーン・モスです、アメリカ NY のキッチンというスペースのダンスのキュレーターで、今東京芸術大学で講師をされています。お隣が...自己紹介をお願いします。

余越保子 (振付家・ダンサー)

NY で作品を創って発表しています。彼と一緒に一年間日本に滞在しています。余越保子と申します。

イブ・シェリフ (カナダ USINE プロデューサー)

カナダ・モントリオールのコンテンポラリーシアターの劇場から来ました。

佐東

彼は国際交流基金の招聘で、3ヶ月滞在して、いろいろな日本のダンスを見ています。

水野

ひとつアーティストのワークショップの活動を紹介したいのですが、余越さんと去年京都で話した時におもしろいワークショップをやったということを聞きました。振付家専門のワークショップで、ディーンと余越さんが面白い手法を発見したということで、是非京都でもやりたいんですが、先日、日本で初めてセッションハウスでやったとのことですので、方法論とどうだったかをお話いただけますか。

余越

ダイアログワークショップという名前なんです。アメリカには振付のワークショップでいろいろ方法がありまして、第 1 に作品の創り方を学んでいきます。私たちが考えたのは、アーティストが自分から作品を切り離すのが大変難しい。というのは、自分が踊る事によって作品をつくるものですから、作品と自分の距離感がなくなって、それによって客観性を失ってしまう。そこでぶつかっていく問題が多い。

私たちは 2 人ともアーティストなので、そういう問題をワークショップで創り出してアーティストと一緒に問題解決を試みるというのが目的のワークショップです。なぜダイアログワークショップかというと、会話ですよね、自分と作品との会話、アーティストとアーティスト同志の会話、作品とオーディエンスの会話、どのように客観視するか、を考えました。

やり方としては、一人一人が作品を持ってきて、伝言ゲームのように次の人に渡していくわけです。6 回くらいプロセスを繰り返すうちに自分から作品が離れていく。人の作品をもらってそれを作り変えて行くという行為を延々と行う。自分の作品は人の手に渡って自分のところに帰ってくる。もとのオリジナルともらった作品を両方やってみる。トランスフォームする時にいつも作品についてコメントしあいます。一日 4 時間 6 日間で 8 人が限定なんですけど、日本で行ったときに、私たちがぶつかった壁は、振付という概念が日本ではあまり...、日本ではソロが多いので、ソロを作ることにより、踊ること自体の解釈が振付になってしまい、作品が離れていかない。結びつきすぎて、離しても、もらった作品に解釈をしてしまって、発想の転換が何度やっても出来ない。それでアメリカのやり方と変えまして、やり方を細かくして、壊していく作業、とにかく壊していくと(作業の範囲を)狭めてやると、参加者はやりやすいようでした。最後には割と面白いマテリアルも出てきた。日本人は文化的に自分の作品に対して話をするとか、人の作品にコメントをつけるということに得意でないというのが目に付きました。

水野

最後に自分のつくった最初の作品が戻ってくるんですか？いろんな経路を経て全く違う形になるんですかね....。

余越

まったく違う作品が戻ってきますね。テッド・ショーンがいて、マーサ・グラハムがいて、マース・カミング・グナムがいて、ジャドソン・チャーチのエラーがいて、私たちの世代がいて...ダンスの歴史が物語っているように、盗んでは変え、盗んでは変え、という歴史を繰り返しているのだから、それを個人的に経験する。自分の身体を通して疑似体験するみたいな感じですね。

マーサ・グラハムの作品とは今のコンテンポラリーは全く違うかもしれませんが、本質的なところはあるのではないかと...？そういう探り方です。

水野

他にアーティストで自分はこんなオリジナルなワークショップをしていることがあれば、紹介していただければと思います。最近された方とか、こういうところが難しいよね...とか何かあれば

佐東

あと、すごく失敗したワークショップなどでもいいです。

水野

石川ふくろうさんが、最近ワークショップをされたと聞いたんですが...

石川ふくろう (振付家/プロジェクトふくろう)

実は今回初めて高知県の美術館でワークショップをやらせてもらいました。トライアルでやってみたいなというのがあったんですが、人集めから含め苦労しました。先週初めてやって今月 4 回やるんですが、私の場合作品をつくる時に特徴としているものは、立体的な機械仕掛けの作品をつくる事もして

いるので、その辺と身体表現とのコラボレーションを目指して表現しています。そういうようなことをワークショップのなかで私も模索しながら、次回の自分の作品をつくるためにも、今後の自分の活動の指針や再確認のためにできたらと考えています。

実際には、今までに作った動くオブジェを持ち込んで、自由に参加者の方と対話形式でワークショップが出来たらなと思っていて、あまり振付とかテクニク的なことは考えない。ダンスをやられている方よりも、他のジャンルの方と一緒にやりたいと思ったので、チラシは美術館に特に多く置かせてもらい、結果美術館を見にこられたいろんな方と一緒に模索しながらやりたいとは思っています。

佐東

ふくろうさんにとってワークショップをやってみようというきっかけは依頼された以外になにかありますか？

石川

そうですね、今回は自分の意志で計画・企画しましたが、表現するという、作品をつくる上において、ジレンマに陥ることが毎回のようにあるんです。私の場合は身体がうずうずして動くというよりも、舞台には立たずに外から客観的に見て作品をつくるので、自分の心象風景をなるべく具象化・具現化・形あるものとして空間構成します。いろんな人にみてもらい、自分の再確認も含め、作品を見られた方と何らかの形で対話的なことをしたい。先程の岩下さんではないですが、自分もコミュニケーションは苦手なだけけれども、コミュニケーションはしたいとやっぱり思っていて、そういうような発端があって作品を創り続けているので、そういうジレンマに後ろ向きになることもあるけど、何らかのかたちで自分のやっている事を再確認したい。そういう意味でワークショップというのは実際に対話ができるので、いろんな人と接触して吸収できる場があればと考えて自主的に行いました。

吉本光宏 (ニッセイ基礎研究所)

さっきのワークショップの報告を聞いていて、3種類ぐらいあるという気がしました。

ひとつは、参加者とワークショップをしてステージをつくる、2つ目は劇場ホールが主催で身体を動かすというダンスの手法を使い参加者に体験してもらい、もうひとつは学校にいたり、病院にいたりといった外に出るワークショップ。

1つめと2つめは、主催者がいれば仕掛けられていくが、3つめのタイプは、ダンスの無いところにダンスを持っていくということがあるので、それをオーガナイズするのが難しいように思います。それをゲリラ的にやっていくというのが、一番JCDNがやる事かなと言う気がして興味がある。ダンスではなくて音楽の話なんですけど、地域創造が行っている公共ホール音楽活性化事業を手伝っています。音楽家が学校に行くというのを組み合わせていますが、それをビデオで撮っていて、チャンスがあると人に見せる。それを見ると、初めてバイオリンをみた子供の目がらんらんとしてきたりして、(そう言うビデオを)先生とかが見るとその効果というのが一目瞭然なんですね。それでどんどんやりたいと言う風になる人が増える。プロモーションできるツールがあれば、そういうことがゲリラ的におこせるのかなという気がしました。

ステージの作品をつくることとまったく違うこと(ワークショップ)に対して、アーティストはポジティブに考えられるのかどうかかわからないのですが、ポジティブに捉えることができるアーティストがいるのかどうか伺いたいですね。

佐東

確かに言葉では未経験者を対象にワークショップしてますよ...と書いていますが、やはり何か映像を見たりしないと、なかなか実感としてわからない。小学校に持っていくのが大変ではないかというお話もありましたが、吉村さんは担当者として小学校とかの先生との間に入って、どうでしたか？

吉村美紀 (福岡市文化芸術振興財団)

ダンスに限らず他の事業でも学校にアーティストが出向いてワークショップをするということをやっています。学校に持っていく事業については教育委員会が共催で行っているのです、そこを通して学校のほうにアンケートを出して希望を募って行うという方法を取っています。基本的には、コンテンポラリーダンスをやりたいと回答してくれた学校には、ダンスに熱心な先生がいるときに、学校で創作ダンスをやっているようなところが多いので、そういう意味でこちらから連れて行くときにそれほど苦労はしたことが無いという印象です。

佐東

コンテンポラリーダンスの知識が先生方にも少しはあるという感じですか？

吉村

そうですね。多少はあるように思います。逆に、近藤さんのようなアーティストに対してどうやって先生のほうから直接連絡を取って連れてくれば良いかわからないので、私達のほうから提案させていただいた事が、先生にとっても良いようです。

水野

学校のプログラムが難しいのは、やりたい学校は増えて来ていると思うのですが、一番の問題は学校側が予算をつけることができないということがあると私は思っています。“芸術家と子どもたち”の堤さんが先程まで来られていましたが、アーティストに払うギャラは主催者側なわけで、特に公立の学校では、年間予算は観賞するくらいで、ワークショップをやるための予算というのが見ついていないと思います。学校側としてやりたいというところが無ければ、斡旋しにくい。JCDN としてもやりたいというところがあっても誰がお金をもつのかというのがある。文化庁などから、こういうことに対して予算を取るようなというような指導が学校側に出されない限り難しいと思います。嘆願書を作って要請していくことなどが必要かもしれない。

吉村

おっしゃるとおりで、提案するとやはり最初に学校の方には予算が無いといわれる。芸術交流宅配便という財団の年間事業の予算で学校にアーティストを連れていくので、学校の金銭的負担が無い為、多くの先生が是非来てくださいと言ってくれる状態です。

水野

先程吉本さんがおっしゃった、アーティストの方がやりたいと思っているかどうかお聞きしたい、ということですが、アーティストの参加が今日は少ないですけど、今ここにいるアーティストの方はやっている方が多いですね。

佐東

近藤さんのワークショップを見ていて、子供の扱いが慣れているなと思ったら、ほとんどが教員の免許を持っているときいて、なるほどなーと。近藤さんにとっても学校でダンスをやることに意味があると考えているとのことでしたが…。

近藤

ちょうど30も過ぎて、20代のころには自分が果敢にやれば良いと思ってたんですが、たまたま教育学部で小学校の教員免許を持っていてということもあり、義務教育で学校に行っている子供に、こっちが教える時にストレートになれる。ポジティブに考えていますね。

水野

近藤さんと岩下さんがセットでいくといいですね

近藤

そうですね。ちょっと地域に行くと、(初めて)行ったもん勝ちみたいなのところもある。地方にアーティストが行ったらそのアーティストの影響が残っちゃう。いろんな種類があった方がいいですし。明るいダンスの方がいいと言われちゃうと、それだけじゃない方がいいし。

佐東

個人的には都市部にアーティストが集まっていて、地方にいくとまだまだつくる人がいないので、例えば、近藤さんだったら俺は東京に住んでるけど半分福岡なんだとか、白井さんだったら東京に住んでいるけど半分栗東みたいな。僕が京都に住んでいるからかもしれませんが、東京というのが飽和すぎて、時間で区切られていく印象がある。アーティストとして根ざす場所が、東京だけでなく日本各地に作品をつくる拠点をもつようなレジデンスアーティストがあってもいいかもしれない。栗東地区のレジデンスアーティストは白井剛である、とか、ゆくゆくそうなっていったらと思います。白井さんが栗東に住むかも…と聞いた時は、第1号のモデルケースになるかと…楽しみにしています。

イブ・シェリフ

モントリオールでも何年か前に同じようなことがおきまして、観客数を増やしていくにはどうしたらいいか、一般にもっとダンスを浸透させていくにはどうしたらいいか、と言う問題が起きました。やはりその時もダンスコミュニティでこのようなミーティングを開いたんですが、政府の文部省のような機関に、踊りが国のアイデンティティのひとつになることをまず理解してもらわなければならないのではないか、という結論に達しました。たとえば、ケベックが世界的に有名なのはラララ・ヒューマン・ステップスのような有名なカンパニーが出たことで、ケベック市が世界的な名声を得たということですが、政府が、ダンスが国のアイデンティティになるという認識を得た後に、「ダンスの日」というのを設けたらどうか、ということになりました。カナダには「演劇の日」や「ダンスの日」というのがありますが、一般人の間での、ダンスがかわいいもの・わかりにくいものという意識を変えるためにも、スタジオや劇場が門戸を開放して、一般の人たちの敷居が高いとか、わかりにくいという意識を変える必要があるということになったんです。それ以来、ダンスカンパニー・アーティスト達が、年に2回くらいは公立学校に行き、生徒に踊りを見せたりすることで、若い生徒達は将来のお客になっていくわけですから、観客育成を大切だと考えて、過去10年くらいかけてそういうプログラムが出来ました。そういう事をするためには政府とメディアの助けが無くてはやはりできない。

水野

日本でダンスの日はいつできるのでしょうか。そういうふうに嘆願しなければならないのかもしれない。

佐東

やはり、そういう働きかけがあって動いたということですね。他には...

五島智子 (ダンスワークショップコーディネーター&ナビゲーター)

昨年から介護はダンスだ！というテーマのヘルパー・介護者を対象にしたワークショップを砂連尾さんと寺田さんに頼んで3回ほど開催しました。私自身がここ4、5年高齢者・障害者のヘルパーの仕事をしていて、介護者の立場でいるんなストレスを感じています。マンツーマンで患者と関わる中で人と人との関係が仕事という、介護者が抱えている苦悩を感じました。介護そのものがダンスの本質に近いものがあると感じました。第一の目的は介護者のストレス発散というか、リフレッシュする、患者さんにはいろんな相手がいるんですが、ダンスを通して解決していきたいと考えた。

先程の城陽市の方とリンクしますが、チラシはワードで作って100枚くらいしか印刷してないです。新聞の告知版にちょっと出したりだけですけど、すでに15人以上の方、コンテンポラリーダンスを知らない人50、60代の方からも電話があった。やはりダンスといたり、ワークショップという言葉を出してしまうと、敷居の高さや馴染みのなさがあるのは事実で、実際に参加して見たらこんなだったんですか...ということが多い。ただ、未経験者対象といっても、逆にこういう職業限定をすると参加者の人はみんなおんなじ職業なんだというようなことで垣根が取り払われて、初めて参加する人も来易いみたいです。介護はダンスだ！！と言葉を投げたとき、言葉のコミュニケーションが難しい相手と、どうやって身体で対話するかという、ダンスの本質に近く、あるいはダンスそのものであるという思いがあり、そういう人が参加してくれるとすばらしい反応が返ってくる。普段から人との関係性を考えている人にとって、何か役に立っているという実感がすごくある。ただやはり、それがアーティストにとってどうなんだろうというのもあり、すごく反応は大きいけれど、どうやってそれを展開していけばいいかを考えています。

砂連尾理 (振付家・ダンサー/砂連尾理+寺田みさこ)

実際に去年6月から始めましたが、50代や60代が中心でして、初心者であろうと介護者であろうと誰でも同じなのは、身体を持っているということ。関心の角度が違うだけで、アーティストがどう一緒にやるかに興味を持っていれば誰がいてもワークショップは出来ると思います。僕らはデュオでやっていることから、人と人との関係をどう言う風に紡いでいくかをダイレクトに見せることもできるというのはありますが、どんな切り口でも人間に興味があれば介護者でも初心者でも小学生でもアーティストにとって可能性があると思う。

倉知桂子 (大学助手)

ワークショップのマッチングシステムやビデオブックのことをずーっと考えながら話を聞いていたんですが、どういふのだったらワークショップの新しい形のものが出るのか。

地方からでも見ればわかるかと思ってやりくりして確かめに行きますが、ワークショップのビデオファイルの場合は、基礎データプラス映像、映像とテロップ(言葉)というか、説明付で聞くと、アーティストがどこに視点を持って活動しているかがわかる。今日のお話だったら近藤さんならとことん楽しみたおす人なんだとわかる。キムさんなら敢えてかたい身体に向いていこうとしているのがわかる、自分がワークショップを呼ぶ立場だったらその部分が欲しいとは思いますが、ビデオブックではどこまで

それが伝わるのかを考えていました。

ワークショップについては変化に立ち会わないとわからないと思っていたんですが、余越さんの映像はなく言葉だけだったけれど、意図するところは非常によくわかった。岩下さんのインタビューの話で、それに映像がついていたら違ったかもしれないし…映像プラス言葉ということでは近藤さんのNHKの話もありましたが、岡山でウォルフガング・シュタンゲさんのワークショップをした時の報道はニュースで1,2分流れたただけだったのにすごく良かった。それは取材ではなくウォルフガングさんの言葉を拾ってくれた、参加者の1人2人の言葉を拾ってくれたのが、非常に良かった。

財団やホールの方は、お金持っている、場所持っているということが非常に良いなと思いました。私は普段福祉分野で働いているので閉塞を感じている。現場の閉塞を。

ダンスブックの形は映像・言葉がほしいと思いました。

水野

アーティストのインタビューとか、どういう視点でワークショップを捉らえているかとかを入れたら良いのでしょうか。そういうのができたら良いですね。

佐東

映像にアーティストの言葉がかぶっていたらいいんでしょうね。

倉知

この間東京であったダンスアンドメディアジャパンがビデオを上映した時に抽象的な詩的な重いものだったんですけど、そういう作品紹介ではなくって…

水野

このアーティストだからこのワークショップができる、どういう姿勢で向っているのか、取って付けたようなワークショップはあまり意味がないので、アーティストの考え方とかダンス観も含めワークショップの資料に入れていければわかりやすくなるだろうと思います。毎年更新していくと、とてもわかりやすい物ができるかと思うので、また知恵を貸してください。

志賀

JCDN がコンテンポラリーダンスの普及に対して活動しているということもあって、今語られているのはアウトリーチとしてのワークショップが中心になっていたと思います。アイホールが関西にある劇場としてダンスのプログラムをやってきて、大谷さんのトリイホールや DANCE BOX の活動があったり JCDN があったり、そういう状況の中で劇場プロデューサーとして、どういうワークショップを今後アイホールでやっていけばよいかを考えています。アウトリーチのワークショップはまだまだいろいろあるでしょう。小学校も出来てないし中学校も出来ていない。そうなったときにアウトリーチやワークショップができるアーティストが少しは生まれたがまだまだと思う。コンテンポラリーダンスって何？と言われていたこの10年から少し角度を変えないといけないところに来ていると思う。

ある程度活動してきたアーティストが、いわゆるテクニック伝授のクラスではなく、どういうワークショップ・プログラムがあったらいいと思うか、アウトリーチプログラムではないワークショップの形についてもどこかで話ができたらいいなと思います。そう言う意味で余越さんが先程おっしゃった事、非常に興味があります。

河合雅樹 (JCDN ボードメンバー/インター・アクティブ(株)・シニアプロジェクトコーディネーター)

明日の夜社会から見たダンスの役割の司会をしますが、よくみると、この司会のパネラーは、一人は横浜市の職員、一人は水上バスの社長。司会の私はかつてはプロデュースしたことがあるが、今は事業開発系のコンサルタントをやっています。およそダンス関係者ではないところで活動している人間が3人並んでダンスを語ろうと言う無謀なことをやろうとしています。

今日の事例紹介の中で、キムさんの素人に学ぶことがあるという話と、大谷さんのワークショップというのが作品をつくることはまた違うアート行為であるということ、そして志賀さんのアウトリーチとは違うワークショップアプローチがあるという話が印象に残りました。ダンスのワークショップは、ダンスをつくったり作品を創ろうとしている人以外にも役割や意味合いがあるということがわかってきた。それをやることは、アーティストが自分自身の作品創作とは別なコンテキストがあるかもしれない、違うものが生まれるということに期待がある。

明日の話はダンスじゃない人にとって、ダンスってどんな意味があるんだろうね、ということを考えていただく機会になればと思います。

伊藤キム

さっき志賀さんがおっしゃっていた、ワークショップをするアーティストを育てるということに関連することなんです。僕自身もワークショップを始めた時、教えるのが非常に苦手だった。言葉で自分がやっている活動を伝えるのがとても苦手で、言葉にならないから踊りをやっているというのがあるかとは思いますが、自分もだんだん慣れてきて、ワークショップをすることで違う刺激を受け、違う方向性が生まれてきた。ワークショップって、アーティストの持っている潜在能力を引き出す道具になることかもしれない。クラスだと単に技術を人に教えるということだけだけど、ワークショップはそうではなくて、アーティストの能力が試される場であって、そういう意味ではほとんど創作と変わらないと思うんですね。アーティストの能力を引き出すためにも必要だし、特に日本人の場合は言葉でそれを表現するというのがとても苦手、人前で表現をするというのが苦手。ワークショップという場を通じてアーティストを育てていく、振付家としてダンサーとして強力にするという視点もプロデューサーには持っていたきたいと思います。

忙しいからワークショップには来ていただけないのでは？とよく言われるが、もっと気楽に、嫌がっているアーティストを引っ張り出すぐらいの感じでワークショップをやらせるぐらいのところがあっても良いと思う。

ディーン・モス (Kitchen ダンスキュレーター)

今までの話を聞いてワークショップはひとつの道具でしかない、ひとつの方向に使えるものというような感じを持ったが、スポーツ、野球のようにミニリーグやメジャーやマイナーのようにいろんなレベルのものがあると思うんです。ダンスに全く関連の無いコミュニティに対してのワークショップ。その人たちにダンスの使用法を教えるという考え方。マイナーリーグのレベルになるとテクニクや踊りの構成のようなものを教えるワークショップの考え方。最後にメジャーリーグ。アーティストがアーティストのためにやるレベルの高いワークショップで、アーティストックな探求の場となるワークショップも絶対に必要だと思う。ワークショップはそういういろんなレベルを総てカバーする言葉であるべきだし、プロデューサーはそのいろんなレベルを総てカバーするようなプログラムを作っていくべきだと私は考えます。そういう意味で今日のフォーラムはワークショップの可能性を探求していくという、プロデューサーが将来どういうプログラムをするかなどを話す非常に大切な役割を果たしていると思う。

西田尚浩 (京都市東山青少年活動センター)

志賀さんの話を聞いて考えていたが、自分がカウンセリングをやっているならば、自分が困ったことはカウンセラーに相談をすると思うんですね。ある医者が困った問題は他の医者でも同じ問題にぶち当たる。同じ問題で打破できないことが多いと思う。社会がいろいろ考えている問題で、教育者、政治家がいる、ダンサーがいる、演劇人がある。ダンサーとか演劇をする人達が、そういうところにうまく入り込めれば、全然違う形のワークショップが考えられるし、そういう発想があるんじゃないかと思いました。

白井剛

ワークショップについていろいろ考えていて、キムさんの話もそうだと思うし、介護はダンス！！だというのとも興味深かった。僕の中でこの2つはつながっているんですが、介護をやっている方とかは、何かしらコミュニケーションができない部分を感じていたり、自分の身体・相手の身体にコミュニケーションを意識せざるを得ない状況なわけで、介護はデュエットのダンスみたいだと思った。対象をあえて限定してみると人が集まるというのもまたおもしろい。ダンスが発生しそうなところ、隙間のようなところを自分で探してみることもあると思う。

自分の身体と断絶があるような場所を探していくと、またそこからダンスが広がっていくことができるかも。自分が会ったことが無い人に出会えたり、テンポ感の違う小学生とコミュニケーションをどうやってとったらいいのかということもあるだろう。そういう試行錯誤が、すごくアーティストを成長させるものだな、と思う。

佐東

ダンスというのが始めにありきなのではなく、結果的にダンスと呼ばれるものになってきて、アーティストにとってもそれがダンスの発見なのかもしれない。自分のやっていることがダンスになるかもしれないし、ならないかもしれない。でもまたNHKの話のように全然違う出し方をしたら、また違うかも知れない。

白井

自分の馴染んでいる言葉に引っかかるんだろうなと思う。コミュニケーションをテーマにすると、不安げな人が集まってしまうような気もするが、階段主義みたく、自分たちから普段から違うものに出て行ってこちらからコミュニケーションの断絶というのをつくってしまって、何気ないところでダンスが発見されたらおもしろいなと思う。

(終了)

分科会総括

2003 年 6 月 7 日土曜日 13:30 - 14:30

【司会】: 佐東

§ テーマ1 「ダンスにおけるスペース・劇場間のネットワーク・共同作業について」

> 発表者: 佐東 (JCDN 代表)

(参加者 13 名)

ネットワークの利点

- フォーラムなどの事例発表など、具体的な例を知ることで地元での活動の方向をより具体的に模索できる、様々な規模・状況を持つスペース、支援団体の連携は、次代のアーティストを育てやすい状況を作る。

どういふネットワークの在り方が理想か～情報の収集と有効活用～

- 劇場施設なのか、支援組織なのか、その性質、規模、目的によって必要なネットワークの形態は違う。また、地域が違えば問題も違うので、参加メンバーが共同作業やネットワークの必要性を感じていないと難しい。現在の問題を見据えた先の具体的な提案が必要。
- 各地域でのディスカッション。例えば「踊りに行くぜ！」と平行した形でのミーティング。開催地区ごとで、アーティストや地域の活動団体の情報収集し、年1回東京で報告をする形はどうか。
- フォーラムで回収した情報を日常的に提出していくにはどうしていけば良いか。
- どういふ事例があり、誰が何を欲しているかなど、地方の中心的なホールがアートセンターの機能を持ち、情報に制約を持たない形で情報公開を行っていくことはできないか。

ネットワークの具体案

- ダンスを身近に感じる仕掛けとして、ワークショップのネットワークを展開できないか。
一般の人にとって劇場に行く事自体、敷居が高い。ダンスというより、体を動かすというような柔らかさがあると、一般の人には気安い。
- 海外招聘アーティストの情報共有など、いくつかのスペースでの共催、巡回の可能性を考えられる情報ネットワーク。それに伴う移動費の折半などコストの削減。
- 常にプラン段階の情報が流せるような密なネットワークができないだろうか。事前に公演内容を知り、企画実行の決断をする材料がほしい。
- 必要な人が必要ところで相談ができる場を作りたい。きちんとガイドラインを設け、地域ごとのウェブやメーリングリストの二本立てなどどうだろう。
- 見るきっかけをつくるネットワークとして、全体的に観客がいない所を掘り起こすために集客率の高い催しも必要。ダンス公演のあるところ自体少ないので、そういうところから耕すことで全体の流れとして発展していく可能性がある。
- 障害者対象などの特定のワークショップを広げるためのネットワークなど、小さなダンスの必要性に応じる事も大切。
- 小さな地方都市では大きな規模の公演などは集客の問題でできない。ワークショップの規模だと

可能性がある。ネットワークの規模でも、そういうものなら繋げられる。

- 地方の舞台のイメージというのは非常に凝り固まっているので、多様性を学ぶ場としてコンテンポラリーは有効。地元の学校教育にも、刺激を与えたい。
- 実際の現場の人と行政サイドの熱意のある人が出会える場がほしい。
- 急遽の連絡網みたいなメーリングリスト。急な助成金情報などは欲しい。
- 日程がぶつからないようにするというカレンダーがあってもよいのでは。
- 繋がっていく為には若手でやる気の有る方の情報がほしい。人が見えると積極的に繋がっていく。DTW(アメリカのネットワーク型オーガニゼーション)でプロデューサーが作品を見に行く為に助成金をDTWがうけ、分配するシステムがある。やる気のある若手が集まる場にならないか。

ネットワークを広げる上で現在見えている問題点

- 公共と民間の経営やシステム、規模の違いなどから統一した動きができない。
- 広域のネットワークは、ネットワークを構築するために事務局サイドに手間暇がかかる。
- 進行中の企画情報を公開する点ではシステムを利用するメンバー相互の信頼関係が必要。本当にコアな情報を知らせる為の主催者・劇場サイド限定のメーリングリストを作ってはどうか。
- 情報交換は必要だが、あまりにも情報が多いと結局全てが見られなくなっていく。
- 公共ホールの問題として、3年ごとの人事異動で、継続したネットワークの構築ができないという問題があるが、現在NPOが全国に増えていく中、公共の中の専門家としてのNPOの在り方が行政を変えていく可能性を持っている。それが各地にあることによってネットワークを築いていく可能性がある。また反対に、人が移動していく事も大切。同じところで同じ人が長く権限を持つと新しいものが入りにくい。人材も流動的にいんなところに行き渡るように、ネットワークが国に提言をまとめて出していくようなことがあっても良い。

§ テーマ2 「新しい観客の開拓 PR 宣伝について」

> 発表者: 林(北海道文化財団) 河合(JCDN ボードメンバー)

(参加者 21名/カンパニー制作・学生・公共ホール職員 等)

観客数・層を増やす取り組みがテーマとなった。

- コンテンポラリーダンスの観客数は多分野と比べ少ないのが現状。公共ホールに企画を持っていても、「お客が来ないから出来ない」と言われてしまう。お客が来ないということで公演をしないという結論を出すのではなく、日本のダンスシーンの状況を変える為にも、公共ホールでも観客の開拓をする努力をして欲しい。
- 現状は知人にチケットを手売りすることが多いが、さらに客層を広げていく為に、あるカンパニー制作者の話の中に有効な手法があった。このカンパニーでは、知り合いに手売りする際に必ず、「友達を連れて来てね」と一言声を掛ける。直接声を掛けた知り合いは、自分達の知人だったとしても、その友達は全く知らない人たちであり観客層の拡大につながる。知り合いの立場に立てば自分の友達にチケットを売るという事は、非常に覚悟がいる訳で、この事は「より良い作品を創ろう」という出演者のモチベーションを高めることにもつながり、有効だろう。
- ワークショップを実施することで観客が増えるか、といえれば必ずしもそうではない。ワークショップの実施は新しい観客の開拓には直接的には繋がらないと考えた方が良いだろう。

- 地方公演実施について、地方で公演をしたいと希望するアーティスト・カンパニーは多いが、実際的には地元の地場が無く、なかなか実現できない。以前、沖縄で単独公演を行った東京のカンパニー制作者に参考に話をしてもらったところ、彼らの場合沖縄在住の学生に主体的に実行委員会を運営してもらい、公演を成立させたという。この実行委員会のメンバーというのは舞踊関係者でもなく、ダンスだけに興味があるというわけでもないが、アートに関して意識の高い芸大の学生だった。
- 多分野との交流・様々な分野においてコラボレーションをしていくのはどうか。必ずしもダンスの専門家ではないが、そこにある音楽性やファッション性なりに興味を持つ人がいる、それがダンスの観客層の拡大に繋がっていく可能性はあるだろう。
- 新たに美術・映像、健康をテーマにした層にアピールしてはどうだろう。ターゲットを考えた後に、それぞれに適した宣伝媒体をとることも必要だろう。
- 分科会 2 の参加者は地方で公演企画を実施している方も多かったが、身近なところに制作的な面などを相談出来る相手がいないという問題がある。また、企画を実現していく上で役所なり企業なりを説得するのに困っている。昨日の全体会議でも話に出ていたが、ワークショップなどについて「こういう事をやったらこういう結果が得られる」ということをきちんと文章化していく事が大切。
- 現状は前パブばかりで後パブがなされていないが、公演の後のフォローが次の活動へ繋げるためには大切なことだろう。
- 今後この分科会 2 の集まりの中で関係を持続させていきたいと考え、メーリングリストを作成し、制作ノウハウの情報交換をしていきたい。各地域での情報を共有していくことを目標とする。

§ テーマ3 「カンパニーをいかに運営していくのか 経営・人材・金」

> 発表者: 高木 (JCDN ボードメンバー / 伊藤キム+輝く未来 プロデューサー)

(参加者 12 名)

- どのカンパニーも金をどう調達するかが問題になっている
- 参加者には学生がいたり、ソロワークがあったり、海外の方がいたり、立ち上げたばかりのカンパニーなど、温度差があった。
- どこから手をつけて話をしていくかが難しい。
運営していく上では、アーティスト以外に制作者が必要だろう、アーティストで分科会に出た人は、制作が欲しいという。カンパニー制作サイドからみると、アーティストが欲する制作と、運営側が考えている制作のあり方にギャップがある。
- アーティストとしては、制作的な雑務を誰かにやってもらいたいと考えている。
制作という職種は、プロデュースをする人と制作をする人。一人の人が二つの役割をやるということを制作者が認識し、アーティストと両輪になってカンパニーをつくるということができないといけない。アーティストだけでは考えられないような運営をしていく人がいるということを確認できない。
そこを確認させ、お金の話をファンドレイジングや企業の人、ネットワークの人と会って自分のカ

ンパニーを回して、アーティストと対等の関係になることが、日本で長期的にやっていくためにはまず必要。

- お金の話としては、特に具体的な申請書の書き方のような話には至らなかった。
- 制作者間の情報の共有化の必要性。
ただ、情報の共有化という点では、制作が一人でカンパニーを回すのではなく、お互いに、情報を共有化してカンパニーの在り方を探っていく方法もあるだろう。閉塞的な制作の状況では、全体のマーケットの状況が成り立っていないので、マーケットをにらんで、より全体的に探っていく在り方があっても良い。
JCDN の会員で、制作相談ができるような秘密のページがあったりすると、その中で限定的に話や相談ができていいと思う。
- 助成金が無くなった時に、どうしていくか。
自主で運営ができなくなっているのが現実。しかし、SPAC や四季のように、ごく限られた人であったとしても運営しているところはある。そこを目指すのではなくても、広く制作側が様々な関連性の中で、新しい方法論を考察していく事で、長期的な運営も可能になっていくのではないか。

§ テーマ4 「ダンス評論の今後」

> 発表者: 倉知(Damda!) 水野(JCDN 事務局長)
(参加者 12 名 / 評論家・プロデューサー・編集者・学生など)

- ダンス評論が観客にとって、劇場に足を運ぶことに影響を与える存在として機能しているかどうか、
たとえば、評論の存在自体が日本社会の中でそのような意味で位置付けられていない現状であるが、では、今後私たちがダンス評論というものをどのように機能させていくことができるか、どのようなシステムをつくることができるのか? を主に話しあった。
- 媒体に関して、紙よりも現実的に可能な Web での展開を探った。
- ダンスを観てすぐ書きこめるクロスレビューがあるが、自分のダンスの観方を気楽に書きこむことができ、人のダンスの観方と比較できるのでそこから広がっていくのではないかと思うが、問題なのは、書く人が広がっていかないということ。
- Web マガジンを作るのはどうか。ウェブの表紙から新着批評文とか、批評家のサイトにとんでいけるような仕組み。
- JCDN のフレッシュダンスクリティックや、トライアルなど、若手の育成媒体の例があがったが、初歩的な締切の問題や、招待券が無いなど、責任面での現実的な問題もある。
- 育成面での媒体の工夫、賞は励みになるかどうか。
- 若い人で、批評家を目指す人はいるが、その人達がダンスをテーマにする事が少ない。
- 批評がのっている媒体が、関東の方に偏っている。
- 社会の中での批評の役割機能というものが、批評家の意識はどうか。若手の書き手に問いかけていく。

- 表現としての批評がしっかり確立されていくべきだ。
- 具体的な取り組み案としては、批評の内容の問題よりも、ダンスの批評の状況整備。今ある批評の公開から始めようということ。ダンスのウェブマガジンファイル。
- 書き手、編集者、読み手、観客、制作者、それぞれの立ち場でダンス批評をもっと機能させたいという思いは共通している。堤さんの自費出版した「バックス」にしても、個々の負担を減らし、流通面でネットワークを利用して協力しあうことができないか。
- 関西の公演を観に東京から批評家がほとんど来ない。例えばいくつかの公演が共同して、批評家を呼んで書いてもらうという活動ができないだろうか。東京の人が関西に来る時は関西が、関西の人が東京に行く時は東京が旅費を負担し会えるような状況が必要。
- 会員だけがアクセスできるサイトは具体的に構築していきたいと考えています。
- 今回、話し合われた事が次に発展していけるように、いろいろな提案していただけることを期待しています。

セミナー < 社会からみたダンスの役割。 >

2003 年 6 月 7 日土曜日 17:30 - 19:00

【パネラー】野田邦弘(横浜市都市経営局政策課課長補佐)

／文化政策・観光政策による都心部活性化担当係長)

森谷慎一郎(東京都観光汽船(株)社長)

【司会】 河合雅樹(JCDN ボードメンバー)

／インター・アクティブ(株)・シニアプロジェクトコーディネーター)

セミナー趣旨

JCDN はダンスの制作者やアーティストらが参加しているが、ダンスの中というより、もっと外側に対してダンスと社会の接点を増やしていきたいと考えている。WS もしかり、分科会もしかり、ダンスの作品づくりの話だけでなく、他の場面で役に立てることがある。そちらの方が大きなうねりとなり、本流となれば、活躍の場が増える上に、ダンスがある種の産業の場となるのではないか。どういう役割が可能か。ニーズとシーズが見えているのか、見えていないのかを探る。

野田氏は、地方自治体の職員として、地域における町作り、横浜市の都市部の振興から捉え、森谷氏は、企業の立場からダンスやアートが担える役割を試みている。先駆的な事例を紹介し、自分たちの地域への参考にしてもらいたい。

(最初に森谷氏を改めて紹介)

森谷慎一郎 (東京都観光汽船(株)社長)

はじめまして。水上バスを運行しています、東京都観光汽船の社長の森谷です。

水上バスは、隅田川と東京湾、品川水族館などの観光水上バス、臨海地区への水上アクセスを担います。隅田川を通るコースが水上バスの中で一番歴史があり、浅草から 12 の橋をくぐって下流まで下るルートが観光客の人数も一番多い。年間 100 万人ぐらいです。

浅草から乗船するのが 6 割ぐらいで、浅草寺の帰りに船にのって橋を見るというのがほとんど。観光船、交通という位置付けで利用してもらっていますが、目新しいことをどんどんやっていきたい。目新しいものとは、特にこだわりもなく何でもいい。何でもいいからどんどんやっていきたい。当たりがあればハズレもあるでしょうが、かまわないです。何かやっているという賑わい、目新しさをどんどんアピールしていきたい。ただ、観光を目的に乗船した人もいますので、新しい事への取り組みもまだ完全とは言えません。

観光船として外を見やすいようにするためガラス張りにし観光のアナウンスをするなどしていますが、船に乗ると言うことがすなわち観光で、観光アナウンスを聞きたいであろうと限定してしまっはいけないという考えが、新しいことを起こすきっかけでした。船に乗ることが楽しい、その乗るきっかけが欲しい。その乗るきっかけが観光に限定してしまうと、乗りたいと思う人が限定されてしまう。そういう事を考えて、今試しています。

(ビデオ)

これは、今実用していないビデオです。乗り場のところでイメージできるように流していました。

河合雅樹 (JCDN ボードメンバー/インター・アクティブ㈱・シニアプロジェクトコーディネーター)

先ほど船に乗るきっかけとして観光以外の要素ということで、今回、後ほど参加してもらう「楽の会」の清水さんの企画にのられたということですが、ダンス以外の試みは？

森谷

音楽のバンドがあります。バンドはもちろんアナウンスは無く、音楽を聴きながら乗って頂くというものを実際にやっていますが、年間を通じてはやっていない。なぜなら、バンドを呼ぶのにお金がかかってしまう。バンドの場合は、音楽のプロを目指している学生などに演奏する場を提供しているという感じです。お金ではなく演奏する場が欲しいと言う人に乗って貰えるように取り組んでいる。

観光というもの以外ではアニメのキャラクター。船を海賊船が出てくるアニメ、「ワンピース」風に改造し、アニメが好きな人にとっかかりやすいようにするとか。

河合

アニメの権利を持っている映画とかテレビとタイアップしてですか？これは企画段階？

森谷

予定としては夏には行う予定です。

河合

先ほど乗っていただいた方はおわかりかと思いますが、今日はアンケートを採っていました。(アンケートには)今日はダンスがあるのを知らないで来たということ、面白かったというのが多かった。さっきの船は今、川下りのコースになっていて来た経路を逆に戻っているの、到着後清水さんに来ていただいて、アーティストの意見を代弁して語っていただきます。

では野田さんの方から報告を

野田邦弘 (横浜市都市経営局政策課課長補佐/文化政策・観光政策による都心部活性化担当係長)

横浜市の野田といいます。

実は横浜市に勤務しながら割と文化行政に携わっていた時代が長く、中でも演劇やダンスに力をいれていたことがあり、その時の経験を紹介します。役所の立場から話しをすることで、ダンスを社会と結びつけるポイントはどこなのかな、町作りにとってどうかという点で話しをしてみたいと思います。今日の話の切り口を考えたときに、劇場などのハコでやる場合と、劇場の外でやる場合があります。外でやる時には様々な場所がある。非劇場空間の方が面白いけど、金銭面、安全面などリスクも多い。劇場とは何かをお話できればと思います。

'87年に「メイガーデン」を開催。これは開港記念会館という国の重要文化財に指定された建物があるのですが、そこを五日間借り切って現代美術やパフォーマンスなどを交え公演を行ったものです。

'88年に、三菱倉庫という巨大な綿花倉庫で、演劇や美術展、ダンス公演などを行いました。さらにアートイベントとしては'89年にダンスフェスティバルなどがあります。

(ビデオで上記プログラムを紹介)

内容:ETV8の映像[ステラークのパフォーマンス:'87年「メイガーデン」開港記念会館、モニターを使用したメディアアートのインスタレーション]。/'88年三菱倉庫をつかい、光の作品を展示。/'89年のダンスフェスティバル テレビ編集ダイジェスト。

全体的に、場所探しに苦労しました。こういうことをすると、いろんな提案が来る。こちらとしてはいらっしやいという立場。問題はお金と場所の公演許可につきます。演劇の方は省略していますが、野外劇などもたくさんありました。さっきからの場の問題をテーマにしていきたいとおもいます。

2 番目に特色ということでイベントをどういう手法でやったかですが、市が直轄で主催して企画から仕切ってはなかなかできないと思う。公演毎によって違いますが、基本的には役所は一步下がって、できる分野はお金を一定額出し、場所を提供し、広報する。中のことはそれぞれのプロや市民に任せる。基本的な方向性は議論して決定するが、役割はそのように分担しました。'88 年のイベントは、倉庫を使ったもので前例がない。役所に予算はないが、話が入ってきてしまった。それで役所の人間と、市民で面白い人々とで会議をしたのですが、何かやりたいという話や意見がある一方、お金が無い。ところが当時の企業から資金が出るようになって、そこで実現したんです。役所に予算が無いのに進行してしまった。そのときは横浜市が全体をコーディネートし、企業がスポンサーになり、企画制作は専門家がやり、実際に動くのは市民を中心としたボランティアな人々。こいう役割分担でそれなりのチームワークを作りました。'89 年のアートイベントの時は、かなり役所主導で、市政 100 周年の事業ということもあり、プロフェッショナルなものをやる必要があるだろうということでディレクターをやとって行いました。

こいう倉庫などを会場にしたイベントは、けが人などの問題もありますが、みな面白い。そいう倉庫でやることの非日常性に楽しさがある。そいう劇場でない場所で、町の中で面白いと思う場所があるのですが、そこで何ができるかを考えて欲しい。町作りということ言うと、中心市街地の空洞化で中堅都市の街の中心から人がいなくなってしまう状況のなかで、例えば学生達が自分達の集まる場所としているんなことをやってしまうこともあるし、アーティストが住む事もあります。NY のソーホーが生まれてくる状況に近いものが各地で起こってきているのでしょうか。その中で大事なものは、アーティストがやってしまうのも大事だし、街頭でいきなりやってしまうのもあるでしょうが、そこをプロデュースするという機能が大事。そのことが、単にダンサーに発表させるということだけでなく、アートの行為が場所の問題そのものと繋がりを持ち、アートを通して町そのものを活性化させていくという考え方に繋がる。その事から考えても、できるだけ劇場でないところでやってみることを考える。

美術・音楽・演劇・ダンス、本当は演劇祭をやろうと思っていましたが、中でもマイナーなコンテンポラリーダンスをやりました。横浜市では続きませんでした。神奈川県が続けてやっています。役所の中でコンテンポラリーダンスが認知されるというのは観客動員というような分かりやすい指標からも難しい。そいう指標だけでなく、町の活性化にどっかで繋がっていくこともあると思うので、そいうところも考えていきたい。なぜダンスかというのは省略しますが、ダンスという行為が、町というものとどう繋がっていくか、そこに場の問題があるということをお願いしたい。

最後に今(私が)何をやっているかということ、役人なので、4月に都市経営局に異動になりました。去年までは企画局という市全体の制作を立案するところだったのですが、今はそこ(都市経営局)で文化芸術と観光で都市部を活性化するという活動をしています。ホームページにアクセスしていただくと、今横浜市がやろうとしていることが、これは結構大きな構想なのですが、載っています。これだけ本格的に町作りと文化政策をくっつけてやろうとしているのはおそらく初めてだと思います。

河合

有難うございました。非常に懐かしいビデオ映像がありました。

森谷さんにもう一度お伺いしたい。先ほどおっしゃった、ご自身の会社の事業ににぎわいをもたらしたかったということですが、我々から見ると(船上でダンスを躍らせるなんて)懐が広く見えるが、実際

には、見てどうでしたか？普段と違う事に社員の方々も対応されているし、お客さんへの対応の面でもどうでしたか？

森谷

どきどきしました。今日の場合は、一般の方が半分以上いたかも。300人ぐらいの乗客。今回のダンスがありますよというのを知らないかたがおそらく100人はいました。通常の知らないで乗る人とは違うダンスの関係者も多くいたので、雰囲気もちょっといつもと違っていたし、目的が違う人が混在したので、その辺が心配だった。

河合

ダンスを目的に見に来た人と、知らないで来た人の摩擦のこと？

森谷

そうです。いろんな方がいますので、そういう危険性もある。

河合

それを承知でおやりになったわけですが、社内の方の反応とか、お客さんの声とかどんな感じでしたか？

森谷

全部のアンケートを見ていないので分かりませんが、今回のダンスがあることを知っていたか、知らなかったか、ダンスはどうだったか、という項目を設けました。ダンスに関して2項目設けましたが反応としては半々。すごく面白かったという人はいない。普通か、つまらないかの半々だったと思います。

私の結果としては、まったく知らないで乗った方でも、つまらないではなく、普通という方も半分以上と想像したよりは多かった。

河合

そういうことをやるときに、何でもいからやりたいと思いながらダンスから始めた理由はなんでしょう？学生時代はどういうことをしていましたか？

森谷

学生時代は8人乗りのボートを漕いでいました。体育会系の、スポーツとして。

今回ダンスで、音の無いダンスというのを初めてみました。それぐらい素人で、音楽に合わせて踊るというイメージがダンスにはある。水上バスではアナウンスが入るので、その部分を消さないで踊らなければいけないのでしかたがないのですが、今の段階ではアナウンスを消すことはできません。

河合

野田さん、場のお話がありましたが、場の持つ、非日常的な場所に市民の方に行ってもらっ切っ掛けにダンスフェスを使ったと？

野田

そうでなくて、表現の問題として、演劇やダンスをどこでやるかと考えたときに、劇場のようなハコで

やるより、外でやった方が面白い。外でやると普段見ない人の目に触れる事ができる。それが町作りや都市政策に意味をなすのではないかということです。これが墮落してしまうと、単なる街頭パフォーマンスになってしまうかもしれませんが、社会とどうつながっていくかを考えたときに、劇場だけで限られたダンスファンを対象にしている、少なくともフェスティバルという意味ではだめであろうと。フェスティバルというのは劇場から滲み出して外に出ていってしまうもの。もちろん劇場でしかできないものもありますが、そうでないところもある。そういうのがいっぱいあってフェスティバルになると思っていますので、今日はあえて外での話をしています。

河合

外でやって、劇場に出かけていったお客さん以外の集客がありましたか？

野田

先ほどビデオで見た倉庫でやったスペインのパフォーマンスグループのにしても、演劇・ダンス系と音楽系。音楽系の集客が半分以上。ちゃんとデータを取ったわけではないですが。

河合

例えば、PRの手法としては通常とは違う方法を取られたのですか？

野田

PRの方法は、フェスについては市政100周年でやったので市の広報誌で行いますが、それぞれ見る媒体が違うと思うのでそれなりのメディアへの露出(テレビ雑誌)を行いました。

河合

町作りのところの意味合いが一番大事だと思いますが、市役所の中での了解は？具体的にこういう場所でやるのがどう町作りにつながるかとか、どういう理解？

野田

役所の中の評価は無いです。野田が勝手にやっているという評価だったと思います。が、予想以上にメディアが取り上げてくれた。ここでこんなことやったの？という関心。

通常役所が管理するハコというのは本来目的がはっきりしています。重要文化財は建築を見せている。普通一回見たら二回は来ないところを、そういう建物の中で違う事が行われていたら、一度ならず二度目に来てもあきない。

演劇は、テキストに依存したジャンルなので理由付けができるが、ダンスはもっと応用性がきく。だから歴史的な建物や外でやることに親和性が高い。学校が空いたり、ビルが空いたりした時にコンテンポラリーダンスの人がどんどんやれば面白い。でもそういう案は役所からは絶対に出ないので、そこでプロデュースする機能が必要なんじゃないのということを言いたい。

実は行政の方も、都市の活性化や空洞化対策でそういうことを求め始めています。既に演劇ではフリーワークショップが行われており、ダンスのワークショップがこれに続いている。ダンスも演劇と同様の効果もあるし、場合によってはダンスの方が行政の求めているものと合致しやすい可能性がある。そういう問題意識を持って制作者も考えていって欲しいです。

河合

都市の魅力というのもあると思いますが、こういう記録や記憶として残っていく活動というのが強いと思います。以前話をした時に PR 効果の話がされていましたが、その辺からみても強い？

野田

そうですね。横浜という都市のイメージは、他の都市でやるのと違い、倉庫や洋館などでやると横浜らしいと高く評価される。そういう意味で PR 効果がありました。「横浜フラッシュ」というのをやった時には朝日新聞に4回取り上げられるなど、相当な評価。それは今、丸の内に人が来ているということに共通しています。従来の町のイメージにはないものがあると、人が来る。

河合

野田さんにも船に乗ってもらいましたが、観光汽船の評価は？

野田

船は横浜の方が…。横浜にもポートシアターといって船を劇場にして使っているものがあります。捨ててある船を勝手に占拠して劇場にしている上に、当然避難灯など設備の面でも明らかに違法でしたが良かった。それは沈んでしまいましたが、別の船を買い、クルージングで音楽ライブをするなど横浜の湾内でもいろんなことをやっています。赤レンガ倉庫に随分人が来ているので、そちらの方から横浜駅まで新しく水上バスが出るみたいです。今日の体験のように、シーバスは交通機関として割り切っていたものに、どういう付加価値を付けるかという点で大事なことかと。成功も失敗もあるでしょうが、お客としては移動のためだけでなく、乗ることが楽しいということになってくるのではないのでしょうか。

高樹光一郎 (JCDN ボードメンバー/伊藤キム+輝く未来 プロデューサー)

野田さんがおっしゃるように、劇場以外でのパフォーマンスはいろんな規制が出てくる。伊藤キムは階段でやりたいといいますが、規制は結構ある。発条トにしても、イタリアでやった時に、公共の劇場でないところでフェスティバルをしています。それはプールの水を抜いてその底で雅楽をしていたし、発条トは、水道局の水力発電所の中でやりました。ステージを無理につくって、水道発電を停止してやるなど、変な場所で世界中からパフォーマーを呼んでパフォーマンスをしてもらうというのが、町おこしになっている。それは日本とは規制の仕方が違うのですが、かなりの田舎町であるにもかかわらず多くの方が来る。横浜も、多くの規制がある中で、規制をくぐり抜けながらこれからも野外活動は広がっていくのでしょうか？

野田

野外だけでなく、どちらかというと、学校の中など違う目的で建てられた建物の中を読み替えていくということなのですが、私は役人だから本来は規制をする側。例えば「横浜フラッシュ」では三菱倉庫を17日間借り切って現代美術の展示と、演劇、ダンス、音楽をやった。通常は許可できないが、お金もある、場所もある、だとしたらやるしかない。この時はやることを前提で、規制する側のプロ、建築の専門家、公衆衛生、消防全部が集まってどうしたらできるのかという会議を行いました。そういう面倒くさいことに限ってメディアも取り上げます。

高樹

これからもやっていきますか？

野田

宣伝みたいになります。芸術創造特区横浜というのを今掲げています。日本は外国に比べ規制が厳しく、非劇場空間を使用するのは難しい。そこを例えば横浜では都市部は規制をフリーにし、自己責任で使用を許可するなど、そこまでのことをやっけていこうと考えています。従来だとそういう国が規制緩和を募集するなどはありませんでしたが、横浜の PR も兼ねてこういう事をやっけていこうと考えています。

河合

今、野田さんがおっしゃられた、違う目的で作られたものを読み替えていくという、そこが今回二人に来ていただいているダンスが社会の中で意味をもつポイントかなと。アーティストも水上バスで踊るためにダンスをしているわけではもちろん無い。しかしそれがあつ場面で行われる事によってそういう効果をもたらす事がある。横浜市の振興のためにダンスをしているわけでもないが、それが結果的に地域振興に役立っているということをおっしゃっている。それができるところがアートの力。

でも今までの話を聞いていると、美術でも音楽でも一緒。アート全般の話として成立するが、ではなぜにダンスなの？ということが、もう少しダンス業界のみなさん側がとぎすましていかなければならぬ事でしょう。もしマッチングという言葉があるとすると、マッチングする時にどんなエッジが立っているかということ。

普段僕はマーケティングの仕事をしてますが、商品のウリを説明します。その考え方を適用するならば、ダンスは美術や音楽や文学と違って何が強いのかを際だたせていく必要がある。

加藤さんどうでしょう？

加藤種男 (JCDN アドバイザー/アサヒビール芸術文化財団 事務局長)

その前に、野田さんの宣伝をすると、今から 15 年以上も前にあんなむちゃくちゃなことを良くできたなと思います。あんなことをやったら懲罰をうけてしまうので、案の定ほかのセクションに移されましたが、その後も文化政策の提言について、研究者として続けてこられた。他に役所にそういう事が出来る人がいないこともあつて、今回また文化セクションに返り咲かれた。それは非常に貴重な事。そういうことを継続していくのは良いことだと思います。

森谷さんは、今ダンスでなくてもいいが、自分の事業の活性化というのをなんとかしようと考えておられる。いろんなことが考えられるでしょうが、芸術を持ち込まれ、そういうものも可能性があつかもしれないと考えてこられている。たまたま去年アサヒアートフェスティバルで多少ご一緒しているやらせてもらいましたが、そこで大変興味をもってもらい、実際今のところ何の効果も無いだろうが、水上バスそのものの設計まで何かできないかという話までできるようになりました。そういうことまで考えて活用していくという視野の広さを持っていらっしゃる。

それでダンスが固有にダンスでなければできないことがあるかどうかは専門家ではないので良く分からないのですが、今の時代が何事かを解読していくなかで、(今まで)テキスト重視で「はこうでなければならぬ」ということを我々が大事に持ち続けてきた。ものの本に書いてある事、文字に書かれていることに対する信仰が我々にはあつて、それに対する批評が肉体で表現する所にあるのではないかと思います。

ただ、これにもドグマみたいなものがあつて、舞踏のようなきわめて珍しい表現をつくりあげると、舞踏とはこうでなければならぬというテキスト重視が始まってしまう。それは重要なことではない。アートというのが前例の無いところから生まれるのであつて、そういう歴史的な呪縛から逃れることは難し

いが、そういう伝統的なところから出ていくことが大切。

そういう意味では我々が理解していなかったものが、実は肉体だった。肉体の持っている文脈にも我々は無知で、例えば立ち居振る舞いを見るとキャリアや地位まで分かるというくらい、肉体が持っている表現力というのがある。我々はあまりにも無頓着に書いているものだけを信仰してやってきた。しかし、そういうものから脱却するにはこのジャンルは大変面白い。肉体が持っている力、表現の力がこれから大事になってくる。

河合

肉体と加藤さんがおっしゃいましたが、(昨日のセミナーでも)何人かのアーティストからワークショップ参加者の体についてどうかという話も多くありました。お茶にしても体にいいからということで飲んだりするし、健康とか体とかというのが盛んになってきた。10年以上前に当時総務省が国民の関心事は？とアンケートした時に、「健康」というのがクローズアップされてきた。そういうところからも多くの人が体を意識しているといえる。そういう意味でも、ダンスは音楽や美術とは違うということを実感させることができるのでしょ。

佐藤道代 (振付家・ダンサー)

今話を聞いて、パネラーに質問したいことは…。私たちが提出できるのは体であって存在。実は横浜街頭芸術祭に誘われてやったパフォーマンスで、ほとんどの人が駅に向かって歩いているところを、お客を巻き込んでキャンドルサービスをするような空間を作ろうと思ってやったのですが、その空間は流れてしまう空間なので非常に困難を極めました。そこをボランティアの人たちがサクラになって助けていただきましたが、その中で横浜というのはボランティアの意識も高いと感じました。野田さんにはボランティアと行政との関わりについて伺いたい。それと森谷さんにはお客さんが止まってくれる空間を生かした構想だと今日思ったので、それでダンスというチョイスなのかなと思いを伺いたい。

野田

特別横浜市が行政としてボランティアと上手くやっているかは比較したことがないので分かりませんが、横浜は大道芸とか映画祭とか文化イベントたくさんあり、うまくいっているものは大抵民間がやっています。役所がやっているものはぱっとしないものが多いです。民間が行政に余り依存せずにやるとどうしてうまく行くかという、ボランティア精神を持った人達が自分達の知恵と身体を使ってやっているから。役所も側面的には協力しますが、基本的にお金を出していないというのがポイント。役所がお金を出すと気を使って中身が無くなる傾向があります。基本的には市民が自主的にやっていくものだろうし、行政としてはそれを支援する。

横浜市は350万人の大きい都市なので、顔は見えないが、一つ一つ話を聞いていけば、そこには具体的に動く人達のつながりがある。民の力、官はできるだけ後ろにさがる、それが文化の姿勢でしょうか。そういう意味ではさっき私が話した官主導の文化政策は変な役所が変な事をやった例ですが、一貫しているのは、民間の人達がやりやすいようにどう状況を作るかが官の役目。そういう時はやっぱりボランティアの人達に支えられています。アルバイトを雇ってやった例はほとんどないですね。

森谷

劇場は自分では持っていませんが、船なので、とどまって貰えるスペースがあります。そこをどう活用するか、今は飲食の物販しか無い。我々の会社は会社なので金を稼がなければならないが、こちらから営業マンがモノを売りにいくということではなく、最終的には来てもらわなければならない。ここ

でこういうことをしていますと宣伝をかけて、行ってみようかなと思わせなければならない。

そういう集客施設は全部同じだと思いますが、売上の何%しか宣伝にかけられない中、いかに効率的に賑わいを作るか。何が一番賑わいを作るかという、今一番人気のあるものを呼べばいい。しかしお金があればなんでもできますが、現実的に水上バスの営利を超えて集客はできないので、そういう制限の中いるんな取り組みをしています。

河合

森谷さんところの船というのは、人を集めて有る時間がきたらドアがあいて、時間がきたら、というのがまるで劇場と同じ。違う目的でできたものを読み替えていくというのが水上バスでも言えますね。

(楽の会清水さん到着)

河合

今回の水上バスプロジェクトの目的、感想は？

清水 (JCDN アドバイザー/楽の会 プロデューサー)

私が楽の会でやってきた活動の一環で、ダンスを開いていきたいという思いから。アサヒアートフェスティバルの中で隅田川というキーワードがあって、水上でやることになりました。水上バスという、貸しきるのではなく通常運航している中で行う事により、普通に観光する人に遭遇してもらいたかった。去年は、メディアや告知をあまりしなかったのが、非常に緩やかな中ででき、当初の目的が達せられましたが、今日は、なんか違うんじゃないと思われてしまったかもしれません。今日は310名の客がいて、スペースも狭かった。帰りの浅草からの便は非常に少なく、当初の目的通りでした。ゆるゆると観光している人もいるし、何をしているのかと覗いていくだけの人など、立場立場でゆるゆるしているのがありました。

今日はその状態を皆さんに見ていただけなかった事が少し残念ですが、当初の目的は楽の会の一環でアートを市民の中にしんとうさせていくということです。水上バスは東京の人よりも地方の人が多く乗船する。東京の方以外にもダンスに触れて貰えるのは一挙両得。去年はサッカーもあったので、外国の方も多かった。中学生や若い人もいて、そういう人は単純にアートというよりも、オモシロ半分に興味を持って見てくれるので、それが逆に良い。

アーティストの方も、水上バスでやるということは、まずコンセプトを理解してもらわないといけない。音は使えないし、普通の観光客に不愉快な思いをさせてはいけないと言う制約もありましたが、それはアーティストも楽しんでます。

今日の行きは関係者も多く、楽しかったけれど、きつい部分もありました。でも帰りの船は少ない人数だったので、周囲と良く交感でき、観客と同時間を過ごしているという感覚で楽しかったということでした。

NHK のインタビューも受けましたが、せつ子さんは川に鎮魂の思いを込めてやったといいます。それを若い方にも伝えたかった。天野さんは、初めてインプロをやったが、最初は堅かったけど、どんどん遊べるようになったと言っていました。

ダンスファンの方には、ああいう空間で、パフォーマンス的に不安や不満があったかもしれませんが、そういう目の厳しい方にも耐えうるものでなければならないのですが、特にダンスをみたことの無い人に見ていただきたいというのがあったので、それを第一に考えてやっています。

河合

ありがとうございました。今日ご覧になった方で、ダンスの世界にいる人からはどんな感じを受けましたか？

参加者 1.

地方なので、どんだんダンスを見たいです。印象的だったのは、最初上のデッキにいた子どもがじっと隙間から見ていたということ。ずっと席に座っているだけの人もいましたが、人が集まってきたというのが印象的でした。

途中で道具を配っていましたが、それを受け取ると、ダンスを見に来た訳でなく、一人で来ただけという人とダンス話が始まった。それがステキなおじいさんで、嬉しかったので、記念撮影までした。そういう出会いがありました。

河合

おじいさんとお子さんは満足度が高かったということですね。
今日はお二人に来ていただいてどうもありがとうございました。

JCDNダンスフォーラム2003 参加者名簿

参加者総数

6月 6日 86名 (111名) 延べ参加者数 127名
 7日 70名 (92名)
 8日 42名 (70名)

()内はスタッフ・パネラー・JCDNアドバイザー・ボードメンバー・出演者込みの場合の人数。

NO	氏名	職業	備考	参加日
no1	大久保聖子	特定非営利活動法人 アートネットワーク・ジャパン	東京	6日7日
no2	南谷有花	特定非営利活動法人 アートネットワーク・ジャパン	東京	6日7日
no3	相馬千秋	特定非営利活動法人 アートネットワーク・ジャパン	東京	7日
no4	青砥聡彦		東京	6日7日8日
no5	新井英夫	振付家・ダンサー	長崎	7日8日
no6	伊藤晋	アルカスSASEBO	京都	6日7日8日
no7	三谷幸子	制作/アローダンスコミュニケーション	京都	6日7日
no8	根本ささ奈	アサヒビール株式会社 環境社会貢献部	東京	7日
no9	池田恵巳	ダンスマネージャー		6日8日
no10	石井達朗	舞踊評論家	京都	7日
no11	今 貂子	振付家・ダンサー/今 貂子+倚羅座	京都	7日
no12	岩田恵	アトリエサード 取締役/編集者		6日8日
no13	うらわまこと	舞踊評論家	東京	6日8日
no14	植松侑子	学生		6日7日8日
no15	岡崎松恵	STスポット	神奈川	7日8日
no16	加藤弓奈	STスポット	神奈川	6日
no17	大庭雄策	書籍編集		7日
no18	大庭香織			6日
no19	大橋可也	大橋可也 & ダンサーズ コレオグラファー	東京	6日7日
no20	大野八重子	振付家・ダンサー/DANCE LABO.代表/松山大学非常勤講師	愛媛	6日7日
no21	風姫	振付家・ダンサー	東京	6日7日
no22	木村覚	ダンス美学・批評/国士舘大学講師	東京	6日8日
no23	楠原竜也	パフォーマー		6日7日8日
no24	倉知桂子	大学助手		6日7日8日
no25	荘司哲夫	芸術見本市運営事務局	東京	7日
no26	大原典子	芸術見本市運営事務局	東京	7日
no27	西万紀	芸術見本市運営事務局	東京	6日
no28	志賀信夫	国際協力出版会		6日8日
no29	桶田真理子	国際交流基金 芸術交流部 公演課	東京	6日
no30	上原聴子	コンテンポラリー・アート・ネットワーク	東京	6日
no31	菊丸喜美子	コンテンポラリー・アート・ネットワーク	東京	6日
no32	藤田直義	(財)高知県文化財団	高知	6日7日
no33	五島智子	ダンスワークショップコーディネーター&ナビゲーター	京都	6日7日8日
no34	井上美由紀	(財)相模市民文化財団 事業課	千葉	6日7日
no35	桜井圭介	ダンス批評	東京	7日8日
no36	円呉泰子	新潟市民芸術文化会館	新潟	
no37	島津華生	学生		6日7日
no38	島村陽子	FREE HEARTS	広島	7日8日
no39	清水幸代	舞台制作・アートコーディネーター		6日7日
no40	清水哲朗	東京造形大学教授	東京	6日
no41	草野京子	財団法人城陽市民余暇活動センター	京都	6日7日
no42	鈴木邦江	振付家・ダンサー	東京	6日7日
no43	須藤由紀子	staccato on staccato	群馬	6日8日
no44	岡本純子	セゾン文化財団	東京	6日8日

no45	久野敦子	プログラム・ディレクター／セゾン文化財団	東京	6日
no46	時 悦子	セッションハウス	東京	6日8日
no47	曾田修司	STスポット横浜理事長	神奈川	7日
no48	高本直人	高松市文化芸術ホール	香川	7日8日
no49	高橋大助	JCDNサポート会員／國學院大学専任講師	東京	7日8日
no50	多根ともみ	学生		6日7日8日
no51	竹井豊	振付家・ダンサー		6日7日
no52	丹野賢一	パフォーミングアーティスト／ 丹野賢一/NUMBERING MACHINE	東京	6日7日8日
no53	松本美波	アーティストマネジメント / 丹野賢一/NUMBERING MACHINE	東京	6日7日
no54	山口佳子	パフォーミング・アーツ制作／ 丹野賢一/NUMBERING MACHINE	東京	6日7日
no55	千葉里佳	ダンサー	宮城	6日7日8日
no56	今尾博之	(財)つくば都市振興財団	茨城	6日7日
no57	堤 広志	演劇・舞踊ジャーナリスト	神奈川	6日7日8日
no58	堤 康彦	特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち	東京	6日
no59	永瀬園子	振付家・ダンサー	長野	6日7日8日
no60	並木 誠	学生	東京	6日7日
no61	吉本 光宏	ニッセイ基礎研究所		6日
no62	貫 成人	舞踊批評		6日7日
no63	野村真由美	埼玉大学大学院	埼玉	6日7日
no64	朴 志旋(ばくちそん)	制作／ダンスカンパニーノマド〜S	東京	6日7日
no65	白戸恵子	パークタワーホール	東京	6日
no66	芳賀直子	舞踊研究家／フリーライター／新国立劇場バレエ研修所講師	神奈川	7日
no67	福井恵子	(社)日本芸能実演家団体協議会(芸団協)	東京	7日
no68	緒方有希	福岡市文化芸術振興財団	福岡	6日7日
no69	佐野晶子	福岡市文化芸術振興財団	福岡	6日8日
no70	藤原理恵子	福祉作業所スタッフ		7日8日
no71	北條貴彦	アーティスト		7日
no72	林 恒明	(財)北海道文化財団 事業課	北海道	6日7日
no73	小見純一	前橋芸術週間	群馬	6日
no74	山田奈穂子	前橋芸術週間	群馬	6日8日
no75	三上さおり	世田谷パブリックシアター	東京	6日
no76	辻 奈都子	制作／水と油	東京	6日7日
no77	高橋 淳	パフォーマー／水と油	東京	6日7日
no78	藤田桃子	パフォーマー／水と油	東京	6日
no79	すがれいな	パフォーマー／水と油	東京	6日7日
no80	南村千里	振付家・ダンサー	東京	7日
no81	武藤大祐	ダンス批評／東京大学大学院(美学芸術学)	東京	7日8日
no82	小比類巻由乃	財団法人 目黒区芸術文化振興財団／めぐるパーシモンホール	東京	6日7日
no83	丸 制史	財団法人 目黒区芸術文化振興財団／めぐるパーシモンホール	東京	7日
no84	山賀ざくろ	振付家・ダンサー	群馬	6日8日
no85	山口春美	学生		6日7日8日
no86	藤尾岳史	ゆめホール知床	北海道	6日7日8日
no87	余越保子	振付家・ダンサー	N.Y.	6日8日
no88	岩淵多喜子	振付家・ダンサー／Dance Theatre LUDENS	東京	6日7日8日
no89	太田ゆかり	ダンサー／Dance Theatre LUDENS	東京	6日
no90	Yves Sheriff	カナダ USINE プロデューサー	カナダ	6日
no91	石川ふくろう	プロジェクトふくろう	東京	6日
no92	小川			6日
no93	織田かしょう			6日7日
no94	金沢優華	伊藤キム+輝く未来	東京	6日
no95	荒木志水	伊藤キム+輝く未来	東京	6日8日
no96	前田圭蔵	カンパセーション	東京	6日

no97	monica bressaglia	カンパセーション	東京	6日
no98	柏木陽	俳優		6日
no99	後藤茂			6日
no100	佐藤道代	振付家・ダンサー		6日7日
no101	島村陽子	FREE HEARTS	広島	7日8日
no102	福富達夫	セゾン文化財団	東京	6日8日
no103	田村光男	株ステーション NPO国際舞台芸術交流センター(パルク)		7日
no104	高野美和子	振付家・ダンサー	東京	8日
no105	たかのみほ			8日
no106	安田敬	ダンスカフェ		6日
no107	Dean MOSS	Kitchen	N.Y.	6日8日
no108	乗越たかお	舞踊評論家		7日8日
no109	端野真佐子	ART COMPLEX1928	京都	6日7日8日
no110	根木山恒平	発条ト	東京	6日7日8日
no111	前田愛美	振付家・ダンサー	東京	7日8日
no112	三浦宏之	Mラボラトリー	東京	6日
no113	宮原百合子	オフィス☆宮原	東京	6日7日
no114	三枝淳	演劇崇拜自動焦点		7日
no115	布施龍一	レニバツソ	東京	6日
no116	砂連尾理	パネラー 振付家・ダンサー / 砂連尾理+寺田みさこ	京都	6日
no117	西田尚浩	パネラー 京都市東山青少年活動センター	京都	6日
no118	白井 剛	パネラー 振付家・ダンサー / 発条ト	東京	6日
no119	山本達也	パネラー 栗東芸術文化会館さきら プロデューサー	滋賀	6日7日
no120	近藤良平	パネラー 振付家・ダンサー / コンドルズ	東京	6日
no121	吉村美紀	パネラー 福岡市文化芸術振興財団	福岡	6日
no122	伊藤キム	パネラー 振付家・ダンサー / 伊藤キム+輝く未来	東京	6日
no123	志賀玲子	パネラー JCNDボードメンバー / アイホールプロデューサー / 滋賀県立びわ湖ホール舞踊 アドバイザー並びに「夏のフェスティバル」プロデューサー	京都	6日7日8日
no124	守谷慎一郎	パネラー 東京都観光汽船(株)社長	東京	7日
no125	野田邦弘	パネラー / 横浜市経営局企画調整局	神奈川	7日
no126	大谷 燮	JCNDボードメンバー / NPO法人 DANCE BOX 代表	大阪	6日7日
no127	吉井省也	JCNDボードメンバー / (財)舞台芸術財団演劇人会議 プロデューサー	東京	6日7日
no128	稲石奈津子	JCNDボードメンバー / 早稲田大学演劇博物館・演劇研究センター所属	東京	7日8日
no129	河合雅樹	JCNDボードメンバー / インターアクティブ(株)シニアプロジェクトコーディネーター	東京	6日7日8日
no130	高樹光一郎	JCNDボードメンバー / 「伊藤キム+輝く未来」プロデューサー	東京	6日7日8日
no131	加藤種男	JCDNアドバイザー / アサヒビール芸術文化財団 事務局長	東京	8日
no132	清水永子	JCDNアドバイザー / 楽の会 プロデューサー	東京	6日7日8日
no133	佐東範一	JCDN代表 / ボードメンバー	京都	6日7日8日
no134	水野立子	JCDN事務局長 / ボードメンバー	京都	6日7日8日
no135	長谷川綾香	JCDN事務局	京都	6日7日8日
no136	葦田幸代	アーツアドミニスレーター / JCDNスタッフ	大阪	6日7日8日
no137	樋口貞幸	アーツ・スタッフ・ネットワーク / JCDNスタッフ	京都	6日7日8日
no138	竹原信也	JCDNインターン	京都	6日7日8日